ATARAXIA　React　簒奪王と鋏の魔女

mick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＴＡＲＡＸＩＡ　Ｒｅａｃｔ　簒奪王と鋏の魔女

【Ｎコード】
Ｎ０９４３Ｌ

【作者名】
ｍｉｃｋ

【あらすじ】
むかし、むかしある所に・・・・・・なぁんて、そんな暢気な始まりは俺達にはなかった。謀反で国を追われた皇子である俺と侍女のリゼットは、最果ての街にたどりつき凋落の一途をたどっていた。ここで人生終わるのか？　いや、失ったものは全て奪い返すしかないだろ。そうすればきっと・・・・・・。つーわけで、俺と狂った侍女の物語に、嫌な顔しつつしばらく付き合ってくれよな。

プロローグ（前書き）

具体的な描写ではありませんが、残酷描写有りです。
残酷な描写が苦手な方はお気をつけください。

プロローグ

俺は目の前のどうしようもない豚に欠伸をかみ殺す。

震えながら、床に擦りつけんばかりにひれ伏すその姿は間抜けだとしか思えなかった。

何をいっちょ前に正義の使者ぶってるのかと。

「クビをはねちまえよ」

「はい、ご主人様！」

投げやりに手を振れば、隣に立っていた侍女が飛び出した。

愛らしい外見とは裏腹に、その手には巨大な鋏（はさみ）。

豚が呻（うめ）いて逃げようと背を向けたが、それは自殺行為だった。

逃げられる距離なら背を向けるのが得策だ。

だが、今はそんな状況ではない。

敵の必殺の間合いであるのに背を向けるなど、ただの馬鹿だった。

立ち向かって抵抗していれば、１０秒ぐらいは長生きできたのに。

俺は解りきった結果を見る気分もなく目を伏せる。

予定通り、数瞬後には断末魔とギャラリーからの悲鳴がこだました。

「や～ん、お洋服汚しちゃいました。申し訳ございません、ご主人様……これってお給料天引きですかぁ？」

侍女の悔しげな声に俺は目を開く。

紺色の侍女服と、純白のエプロンがどす暗く変色している。
ギャラリー達は恐慌状態となり、むせかえるような血の臭いに吐き戻していた。
そんな中、汚れた衣服をきょろきょろ見回し、洗濯すれば落ちるだろうかとしきりに気にする侍女の姿は異様としか言いようがなかったが、俺はにっこりと微笑む。
「おう、天引きだな。でもリゼット？　お前がクビをちょん切ったそいつの宝飾品をうっぱらえばおつりが来るぞ？」
その言葉に、侍女の表情が花のように綻ぶ。
「きゃっ！　リゼット、超ラッキーです」
ポケットから取りだした小さい鋏で、侍女はクビが離れた胴体の衣服をむしっていく。
血の付いた宝飾品をことごとく。
ポケット一杯に宝飾品達を詰め込んだら満足したのか、侍女はすたすたと俺の元へと戻ってきた。
ピタリとお決まりの直立不動のポーズを侍女がとるのを待って俺は口を開く。
「で、次ぎに俺様に物申したいやつは何奴だ？」
拾い王の間に俺の声が響くが、返ったのは沈黙だけだった。
それもそうだ。

目の前で物申した奴が、あんな事になったのだから。
誰だって同じ目にあいたいだなんて思わないだろう。
こんな状況で前に出る奴は、真性の馬鹿だけだと思った矢先だった。

「言いたいことがあるのは、僕だ……」

おぉっと俺は思わず拍手してしまう。
やはり、世の中一人ぐらいはこういう奴がいなければ面白くない。
俺は興奮したように隣の侍女に目配せした。

「ようやく主人公様のご登場だぞ。これは気合い入れないとなリゼット」

にっと勝ち気な笑みを見せれば、侍女も笑う。

「リゼット頑張っちゃいますよ、ご主人様！　だから査定に色つけてくださいね。もちろん危険手当も請求しちゃいます」

絶対負けないんだからと鋏を水平に突きだして構える侍女。
そんな俺達に主人公様はうつむいて震えていた。

「……っ、本当に……本当におまえらって奴はっ！」

屑めと鬼神の形相で突っ込んでくる主人公様に、侍女はきゃははっと笑って走った。
金属が擦れ合う嫌な音と互いの武器を弾き合う音がこだまする。
「世の中屑でも強い奴の理屈が通るんですよ。真面目だけが取り柄

の僕ちゃんっ！」

空中で回転した侍女の回し蹴りが主人公様のナイフを弾く。

そして、床に押し倒してクビにご愛用の鋏が押し当てられた。

「フィナーレだ……」

俺が高らかに宣言すれば、侍女は「はい、ご主人様」と鋏を捻ったのだった。

プロローグ（後書き）

妄想イラストから生まれた小説です。
こういう絵が描きたいなって思ってストーリーをざっと組み立てたんですが、
思いの外細かく妄想してしまったので、こうなったら小説にと
１１話完結で一気に書きあげてしまいました。
稚拙な文章で大変お恥ずかしいですが……。

誤字脱字があればのちのち修正していきます。

始まりの玉座

異臭漂う最果ての街。

街と言うよりは廃棄場と言った方が良いのかも知れない。

雨が降っているせいで、余計に臭いが周囲に立ちこめて気分は最悪だ。

だというのに、目の前の馬鹿女……リゼットは嬉しそうにゴミの上をはね回っている。

「ご主人様っ、水が降ってきましたよ！」

「おう、雨はタダだからな。好きなだけのんどけ」

嘲笑（ちょうしょう）したのに、リゼットは心底嬉しそうな顔をする。

「本当ですか？　リゼットがもらってもいいんですか？　後でお金払えってのはナシですよご主人様っ」

「……神様が請求書回してこねぇ限り大丈夫だろうよ」

世の中なんでも金がかかるし、どれもこれも誰かの所有物だが、降ってくる雨だけは誰のものでもない。

茶店に入って水を頼めば金を取られるご時世だが、雨を飲むのはタダだ。

かぱりと空を見上げて口を開くリゼットに、俺は溜息をついた。

「お前も貧乏くじ引いたよな。俺なんかに付き合わずキャーキャー言いながら城で逃げ回ってりゃ、こんなゴミ溜めで生きなくて済んだってのに」

ゴミ溜めの壊れた椅子の上で俺は膝を抱えた。
本当に惨めだった。
東の宝石箱、大帝国「神凪（かんなぎ）」の皇子、ユーイン・ハイエル・神凪の名は……半年前の人生最悪の日に意　味がない物と化してしまった。
あの時、ぬるま湯に浸かってすっかり平和呆けの住人として生きていた俺は、起こった事実についていけずオロオロとするだけだった。
俺がそうだったんだから、親父はもっと訳も解らず狼狽えていただろうなと思う。
代々大きな問題もなく、王位を譲り受けて贅沢に暮らして一生を終える。
そうやって俺達王族は生きてきたのだから、突然起こった王位簒奪劇にただ呆然とするしかなかったのだ。
「本当に、なさけない話だよな……」
力無く俺はリゼットに笑う。
親父のクビがはねられ、親族達は惨殺された。
我にかえった臣下の一人が俺を抱えて必死で城を飛び出してくれたおかげで、俺は斬首台の上にクビを並べられずに済んでいる。
乳母の娘であるリゼットはその逃走に無理矢理付き合わされたのだ。
皇子の世話役として。
誘拐も良い所だと思った。

あのまま城にいれば、王族でもないただの乳母の娘など無罪放免で済んだというのに、とんだとばっちりをくったもんだ。

俺達は追手から逃げて、逃げて……もういよいよ逃げ切れないと思った時に、臣下に剣を渡された。

もはや、ここまで「自害しろ」って事で。

震える手で俺は剣を取ってクビに当てたが、結局その剣を突き立てることは出来なかった。

王族の誇りなんて知ったことではないし、死ぬのが恐ろしくて仕方がなかったから。

見かねた臣下が自分がと剣を取ろうとした時だった……。

リゼットがポケットに入っていた鋏(はさみ)を、臣下の喉に突き立てたのは……。

真っ赤に染まってリゼットは笑う。

ご主人様を害するのは自分が許しませんと。

その子供のような無邪気な笑みに、こいつは壊れてしまったんだなと俺は思った。

逃走の数ヶ月はあまりにも過酷で、常に死が付きまとっていたから。

裕福な家の娘として生まれたリゼットにとって、それは耐えられる事では無かったのだ。

「俺が死ねば元の生活に何食わぬ顔で戻れるってのに……悪いな。あれから半年も経ったけど、自害する根性とかやっぱ未だに沸いてこねぇんだわ」

俺が死ねば付き合う義理はなくなるし、リゼットは実家に帰れる。
そうは思うのだが、相変わらずクビに剣を当てるたびに震えてしまった。
リゼットはそんな俺に頬を膨らませる。
「何を言うんですかご主人様。自害なんてとんでもない」
ちっちと指をふってリゼットは続ける。
「それって負け犬ですよ？　チキン野郎ですよ？　真性のマゾですよ？」
「……最後のはなんか違うくないか？」
別に自害未遂を喜んでやってるわけじゃないと俺は苦言を呈する。
お前のためにやってるのにと。
「ご主人様は細く長く図太く、それこそ全て白い煙で絶滅させたのに、またどこからかはびこってくる悪魔の使いのごとく生きる……そんな方だとリゼットは信じてます」
「嫌な信じ方だ。お世辞でも、もうちょっと別のたとえにしとけよ」
かさかさとゴミの上を動く黒い生き物から俺は目をそらす。
人としてこいつと同類扱いだけはされたくない。
「だって似合わないんですもの。弱気なご主人様なんて」
ぼそりと呟くリゼットに、俺は息をのんだ。
暗い暗い光が目の奥に透けて見えたから。
こいつは俺を励まそうとしているのではなく、そうでなくてはな

らないと自分の世界を守るために脅迫しているのだ。

「厚顔不遜、唯我独尊、自分以外の者は塵のように見下して、これ以上無いってぐらいに冷酷無比で、それと、えーと……好色で、好き嫌い激しくて、我が儘で……」

「だんだんろくでもないガキのたとえになってくな。お前、確かに城にいたときの俺が生意気で鼻持ちならないガキだったのは認めるけど、そこまで酷いイメージじゃなかったはずだろ？」

いや、むしろ穏やかで気弱なくらいだったはずだと憤慨してみせれば、リゼットは不思議そうにこてんとクビを傾けた。

おい……っと思わず口の端を引きつらせたが、リゼットに文句を言っても無駄な事である。

こいつの俺に対する言葉に偽りの気持ちはない。

「わかったよ。俺はとんでもない暴君だよ。それでいいんだろ？」

もういいと俺は鼻を鳴らす。

そこまで悪逆非道な俺様像をもたれていたのかと思うと、なんだかもう何もかもどうでも良い気分にさえなってきた。

辛気くさくあれこれ考えていた自分が馬鹿馬鹿しい。

「はい、それでこそリゼットのご主人様ですとも」

花のように綻ぶリゼットの笑顔に、俺は苦笑いした。

ああいう暗い笑みを浮かべられるより、こっちの笑顔の方が断然良いに決まってる。

だったら、俺は自分のせいでこんな目にあってる馬鹿女にたいして、少なくともこの笑顔を浮かべられるようには努力してやらなければならないのだと思った。

「俺にはやっぱこんなゴミ溜めは似合わねぇよな。何もかも金ぴかで、これ以上ないってぐらい贅沢品に囲まれて。愚民共を跪かせて、褒め称えさせるのがあるべき姿だ」

それでこそ俺だろ？　と強気に笑えば、リゼットは飛び跳ねて肯定した。

俺は壊れたゴミ溜めの玉座から立ち上がり宣言する。

「お前は俺付きの筆頭侍女だ。そんなぺらい布きれじゃなくて、上等のメイド服着せてやる。だから、その日が来るま俺についてこいよ？」

「はいっ、ご主人様！」

降りしきる雨の中、俺の目には確かに失った我が家が見えた。

雨の靄の中で真っ白にけぶる空の向こうの王城が。

遠くてとても見える距離ではなかったが、自分をこんなところに突き落とした極悪狸のイヤらしい笑みまで見えやがる。

「何もかも、全部奪い取ってやる」

同じ目に合わせてやると、俺はボロボロのローブを翻したのだった。

栄光への階段

俺は今、生まれて初めて親に感謝している。
産み捨てで全てを乳母に放り投げ、月に何度かしか会うことがない親だったが。

「今日も変わらずお美しいです、ご主人様」

丁寧にリゼットが俺の長い金髪をくるくると巻いていく。

あのゴミ溜めから何とかはい上がろうとして1年。
俺は暗黒街のボスの情夫として成り上がっていた。

これもひとえに自分が輝かんばかり美しく成長するように、DNAに刻んでくれた親の唯一の偉業だ。
美しく生んでくれてありがとうと俺は思わず今は亡き両親に指を組む。

「ところで、リゼットよ。例の件は上手くいってるのか？」
「もちろんですとも。汚いことやらせたら私の３６０度どこに出る奴もいません」

自信たっぷりで胸を張るリゼットに、俺は満足げに頷く。

暗黒街のボスの座を乗っ取っちゃえ大作戦は恐ろしいぐらいに上手く侵攻中だった。
まったく、ここのボスが両刀使いであることはラッキーであったとしか言いようがない。

底辺産業の暗殺ギルドで仕事をしていた俺達を目にとめた末端組織員が、ボスへと献上してからというもの、俺達の衣・食・住は鰻登りに向上していった。

……向上はしていったのだが、それは決して安易な道のりではなかった。

見目美しい者を多数側近として侍らしていたボスに取り入るのはそう簡単ではない。

こんな奴らに絶対負けねぇ、俺の方が断然美しいに決まってると間違った闘志を燃やす俺と、天然のリゼットコンビは立ちはだかる難敵に果敢に立ち向かった。

結果、俺達はボスのご寵愛ＮＯ．１の座を勝ち取るに至ったのだ。聞くも涙、語るも涙の修羅道とはこのことだと俺は思う。

いや、リゼットは負け組に妙に楽しげに高笑いしていたからそうでもないか？

髪を巻き終えると同時に、ノックの音が聞こえる。

リゼットが音もなくドアをゆったり開くと、恰幅の良い中年の男がいた。

「これは、これは、ボス。よこそおいでくださいました」

俺は薔薇のような笑みを浮かべてボスを招き入れる。

斜め１５度にかしげる完璧な俺の会釈にボスはでれでれだ。

そうだろう、そうだろうと俺は心の中で自画自賛する。

難敵を闇に葬りさった無敵の俺様スマイルに落っこちない変態はいまいて。

今ではすっかりボスは俺の傀儡(かいらい)と化している。

「今日も、相変わらず美しいな」

その台詞は聞き飽きたと辟易したが、さすさすと太股を撫でてくるボスに俺は鉄壁の仮面を貼り付けた。

最初は鳥肌ものだったが、気合いで鳥肌って止められるんだなぁと実感する今日この頃だ。

「ねぇ、ボス。僕、もうこんなしみったれた暗い街うんざりだよぉ」

くりくりとボスの胸元で俺は指を回す。

自分自身に気持ち悪くて反吐(へど)が出そうだ。

しかし、これも野望のためと念仏のごとく俺は自分に言い聞かせる。

「ボス、やっぱ予定通り曾地(そち)国をのっとちゃおうよ。くだらない田舎国だけどさ、やっぱ王様の肩書きってぇ、暗黒街のボスよりいいもんだよ?」

曾地国は金や武力もなく、今の十分潤った組織の力と金さえあればすぐにでも落とせる。

同盟国も特になく、攻め入った所で誰も救援には来ないだろう。

日の当たる所に出てバカンスした〜いと俺が駄々をこねれば、ボスはそうかそうかと豪快に笑った。

「ワシも、そろそろとは思っておった所だ。組織員達も今まで苦労

させてきたからな。貴族の称号でも与えてそろそろ報いてやりたいとは思っておった所よ」

「やっぱりぃ？　ボスはとっても懐が大きいんだもんね」

俺は阿呆がと冷たい笑みをボスに向ける。

報いてやりたいなどと今さら考えても遅すぎるほど、部下の忠誠心はこのボスから離れきっていた。

美少年、美少女蒐集癖に熱を入れ、組織の運営に力を入れなかった者の末路だ。

ある意味、自分の親族達と同類なのだろう。

与えられたポストが絶対のものと過信しているからこそ、裏で進行しているものには何一つ気付きやしない。

「リゼット、駒の準備はどうなっているんだい？」

ポンポンと俺が手を叩けば、リゼットはスカートの裾を持ってうやうやしく膝を折る。

「滞りなく。ボスの御命令があれば、今すぐにでも出陣可能にございます」

「準備万端いつでもＯＫだよね。そう言えば、丁度曾地国って収穫祭の時期だよね？」

「さようにございます。なので農民達は自分たちの田畑を放って国軍に参加する事はないでしょう。死活問題ですので」

「だったら、今が殴り込み時って奴？」

俺とリゼットの一方的な開戦話に、ボスはうんうん頷くだけだっ

た。

少し前まではこんな事は無く眼光も鋭かったはずだが、俺とリゼットが側に侍って依頼はずっとこんな調子だ。

それも俺とリゼットが的確な助言と仕事っぷりで勝ち取った信頼故のだらしなさだが、それが部下達の造反に拍車をかけているとも知らずにと俺はくすりと笑う。

1年かかったが、ここでやるべき事は全てやった。

そろそろこの気持ち悪い二役生活も終わりだと俺とリゼットは顔を見合わせ微笑んだ。

鋏の魔女（前書き）

※残酷描写あります

鋏の魔女

銃を突きつけた俺から逃げるように王が玉座から転がり落ちる。

「何故だ？　ユーインっ」

「何故もへったくれもねぇよ、馬鹿が」

恐怖に引きつった中年の男に、俺は溜息をつく。

出兵してから1月。

曾地(そち)国はなんの抵抗も出来ず陥落し、日の当たる所の王となったボスは、今までの日陰の身の反動なのか、らしくなく正義面して王様を務めようとした。

臭い物には蓋をしろということなのか、今まで尽くした部下達を報いてやるなどと大見得切った言はどこにいったのか。

貴族の称号など与えられる事もなく排除されかかった荒くれ者達は、あっさりと手のひらを返して俺についた。

もともと組織にいた頃から裏から手を回し、俺に従うように手懐けてきたのだから、当然と言えば当然だ。

「リゼット、もういらないから片づけてくれ」

「はい、ご主人様」

俺の言葉と同時に横を巨大な鋏(はさみ)が通り抜けた。

悲鳴と共に転がるクビを俺は邪魔だなと端へと蹴飛ばす。

よっこらしょと俺は安っぽい玉座に座り、目の前の飢えた狂犬達

にこっこり微笑む。

「良いぜ、お前等。好きなだけ持ってけよ。酒も金も女も俺の取り分以外は好きにしろ」

待ての解除に狂気の雄叫びが上がる。

そして、略奪が始まった。

これから城の者達や、城下の者達がどんな目に合うかは想像に安かったがどうでもいい。

結局、国を運営するために必要な税金の大半を徴収するのは郊外の平民達からであって、城下の裕福な税金を免除された者達からではない。

だからどれほど城周辺が荒らされようと、特に国の運営には問題ないのがこの曾地国だ。

狂犬達の餌にはもってこいだったし、これで甘い蜜を知った狂犬達はさらに甘い蜜を求めて俺に忠誠を誓うことになる。

一度知った蜜の味からは逃れられない。

それが人というものだと俺は冷笑した。

「さて、リゼット。第二幕始めようじゃないか」

「はい、ご主人様。既に次の布石は打ち込み済みにございますわ」

最終目標はこんなちんけな田舎国の玉座ではないと俺達は笑う。

俺達の失った宝石箱のようなあの生活とはほど遠すぎる。

「あの極悪狸の奴、俺の持ち物をどんどん浪費してやがる」

「それはもちろん、きっちり１００割利子をつけて返還して頂きま

しょうねご主人様！」

そんな暴利聞いたこともないと俺は笑うが、もちろんそのつもりだ。

全て剥ぎ取ってやるとあのゴミ溜めの中で誓った気持ちに揺るぎはない。

「これからはお前の独壇場だぞ？　好きなだけ遊んでこい」

「はい、ご主人様。リゼットは鋏の魔女の名に恥じない演技をお見せ致しますわ」

かちゃりとリゼットが肩に担ぐ巨大な鋏がぎらめく。

何でそんな物を武器にと変な顔をする者は多いが、俺にはその理由がよく解った。

初めてリゼットが人を殺した時の武器。

リゼットが壊れる原因となったトラウマの一つ。

あれ以来、リゼットは相も変わらず狂った馬鹿女のままだ。

ふと、俺は過去を思い返す。

乳母の娘であった頃のリゼットはいつも母親である乳母のスカートの後ろに隠れる内気な少女だった。

恥ずかしげにいつも俯いて、話しかけてもぼそぼそとしか答えない。

ちょっと転んで俺が膝を擦り剥けば真っ青になって泣きわめく。

そんな少女だったというのに、この変貌はいかに？　と俺は溜息をつく。

リゼットは「ふふん、ふふん」と意味不明な鼻歌を歌いながら、先ほど始末した男の遺体を黒いビニール袋に平然と詰めていた。

そして、突然頭を抱えて狼狽する。

「どうしましょう、ご主人様っ！」

「なんだよ、リゼット」

なんとなく、俺はこの次ぎに続く言葉を予想してしまい胡乱な目を向けた。

もう、俺もこの狂った馬鹿女ワールドに慣れてしまっている。

「生ゴミの収集日は5日後ですよっ？　リゼット大失態です！　5日後に始末すれば良かったですのに」

「むしむし暑い時期だからなぁ……」

「どうしましょう、ご主人様」

「焼却炉で燃やしとけ」

そうすれば臭わないだろ？　と俺が嫌そうな顔で言えば、リゼットはなるほどと手を打ったのだった。

血の簒奪王

世間で俺はこう呼ばれているらしい。
血の簒奪王と……。

なんとなくゴロが悪いし、赤は俺が好きな色じゃない。
どうせならイメージカラーはブルーが良かった。

「呼び名は氷の貴公子とかが良かったよな、リゼット？」
「ベタすぎで安っぽく聞こえますよ、ご主人様」

安っぽさは貧乏を呼ぶと悲鳴を上げるリゼットに、それはイヤだなと俺も同意する。
もう、あの食べ残しの弁当捜す生活だけには戻りたくない。

「だいたい赤はお前のイメージカラーだろ？」

鋏の魔女、鮮血の処刑人、赤の侍女……。
近隣の弱小国を攻め落とすたびにリゼットの異名は増えていく。

一体いくつ付くのだろうかと臣下達と賭をしているのだが、あえなく俺が賭けた数字は越えて撃沈した。
これはいよいよ、臣下の一人が大穴で賭けた数字が本命となったようだ。

「で、リゼット。戦況はどうよ？」
「問題ありません。取り込んだ国は１５あまり。国力だけで言えば１、２を争えますわ」

まずまず満足する結果だなと俺は机の上に投げ出した足を組み替える。

俺が曾地国をまずターゲットに選んだのはそれなりの理由があった。

守りに入りやすく、他にも近隣には弱小国がひしめいていたのだ。

もともと、この土地は一つの国だったが内部分裂によってちりぢりになってしまった過去を持っている。

だから一つずつの国力はたいしたことがなく、ちょっと強力な軍隊に襲われれば白旗を揚げるしかない兵力しか持ち合わせていないのだ。

奇襲によって無傷で残った兵隊達を順序よく送り込み、次々と吸収合併した結果、今や曾地国は一大国家となりつつある。

「一気に領土拡大して反乱の一つや二つ起こるかと覚悟してたんだが、恐ろしいぐらい何もおきやしないな」

「結局、平民の皆さんは誰が王様でも関係ないみたいですよ？」

反抗しそうな奴らは俺が連れてきた狂犬共の餌になってしまった。

平民は旨味がないから手を出すなよと厳命しておいて良かったと思う。

さすがに危害を加えていれば何かしらはあっただろうし、個々の力はたいしたことが無くとも数で圧倒的に勝る平民にまとまられるのは非情に厄介だから。

「さて、いよいよ終幕だぞリゼット」

「長い第二幕にございましたね。観客に飽きられてはいないか心配ですわ」

「なに、心配いらないさ。元々俺とお前だけから始まった舞台だか

らな。観客が全員が帰って閑古鳥になっても俺達二人が残ってりゃ問題ない」

リゼットは長いと言うが俺はそうでもないと思った。
予定ではもう少し時間がかかるはずだったのだが、怯えた国が戦う前に白旗振ったせいで時間短縮できたおかげだろう。
そのため、事態は予想以上に俺に都合良く回っている。

「そろそろあの狂犬達の牙もガタガタだからな。戦続きで休みを求めてる……国力増強もここらが潮時だろう」

甘い蜜を十分吸ってお腹が膨らんだせいか、戦いに対する気迫の低下は一目瞭然だ。
飢えているからこその闘争本能。

だから、次で最後にできることは本当に幸いだ。

「盾代わりになるぐらいには新兵の育成も終わりましたわ。次がいよいよ本番なんですね、ご主人様」
「そうだ、ようやくあの極悪狸にツケを払わすときがやってきたぞ……」

所詮今までのことは茶番に過ぎないと俺は失笑する。
ようやく同じ舞台に立つことができた。

しかし、すんなり幕とはいかないらしい。

「問題が一つ。あの狸の息子だな」
「きっと、突然変異で生まれてきたんですわね」

狸のＤＮＡ一切無し。
母親の遺伝子１００％で構成された単細胞生物なのかも知れない。
それほどに、狸の息子は父親に似ず容姿良し、性格よし、優秀と３拍子揃っている。

「せ～っかく狸の人気落とし大作戦で下の下まで人気を落とし込んでやったのに、あのカリスマ皇子の出現のせいで大打撃だ」
「ご主人様の汚い四十八手も通じませんでしたし」
権謀術数（けんぼうじゅつすう）は俺の大得意とする分野だが、どうもああいう熱血馬鹿には意味不明の信望者という者が付きまとって謀略が通じにくい。
しかし、世の中何事ごともやりようだと俺はにっと口元をつり上げた。

「落ち込むなよリゼット。ああいう皇子にしか通用しない、とっておきの秘策が俺にはあるんだよ」
「まぁ、ご主人様ったら。今度はどんな反則技を思いつきになられたの？」

教えて？　教えて？　と子供のようにはしゃぐリゼットに俺は笑顔を貼り付ける。
きっと教えたら……怒るだろうなと冷たい汗が背を伝ったが、これはどうしても必要なことだと俺は平静を装って声を絞り出した。
「い～や～、反則技なんてとんでもない。これは一般的でどこにでもありふれてる正攻法だぞ？　というわけでリゼット……」
ぽんと俺は力強くリゼットの肩を叩き、はっきりと言い切った。
「今日からお前は俺の侍女クビだ」

そう言った瞬間、恐怖の鋏が泣き喚く声とともに飛んできたのは言うまでもない……。

泡沫の夢

私はご主人様に捨てられてしまった。

クビだと言われてしまったのだから、お側にはいられない。
お側にいられないのなら、帰れる所に帰るしかない。

「おはようございます、ラーシュ皇子」
「おはようリゼット嬢」

私は帰ってきた……神凪(かんなぎ)国へ。
案の定、生きていた父と母は成長した娘の生還に号泣して抱きついてきた。

しばらくしてから、狸の息子であるラーシュ皇子がお見舞いに来てくださった。
うわさ通りの、絵に描いたような皇子様だった。
清廉潔白(せいれんけっぱく)でとてもお優しい。
きっと年頃の娘なら、誰も彼もがラーシュ皇子に恋をする。

ラーシュ皇子は私に酷く気を遣ってくださった。

何か望むことはないか？　というので、侍女にして欲しいと頼んだ。
ずっと家に引きこもるのも気が滅入るし、心配そうな身内がつめかけていたたまれない気分になると言えば二つ返事で許可してくれて今に至る。

「貴方にはすまない事をしたと思っている。貴方は僕の父のせいで」
「いいえ、ラーシュ皇子。確かにあの混乱に乗じて誘拐されてしまったときは、辛くて仕方がなかったのですが……」
私とラーシュ皇子の会話の始まりはいつもこうだ。
ラーシュ皇子は必ず私にすまなそうな顔をする。
「さいわい保護して引き取ってくださった方がとても親切な方で。すぐにでも安否を知らせて母や父を安心させたいとは思ったのですが……」
自嘲(じちょう)的に微笑む私に、ラーシュ皇子は優しげな目を向けている。
「身よりもなく、寂しげなご老人でしたので」
いけしゃぁしゃぁとつく私の嘘に、ラーシュ皇子は疑いさえ持っていないようだ。
優秀だと聞いていたが、世間知らずのお坊ちゃんだと私は認識する。
話の裏をとらないなんて、私の思考にはあり得ないことだったから。
「私を見て……亡くなったお孫さんを思い出されるのだと言われると、なかなか帰るに帰れませんでしたので」
そう最後に付け足すと、ラーシュ皇子は目を伏せた。
穏やかな表情に、安心しきっているのがよく解る。
隙だらけだ。
「リゼット嬢は心優しい……」

「そんなことはありませんわ。ただ、心が弱いだけです」
謙遜(けんそん)したことがラーシュ皇子の中で自分の印象がさらに上がったのをリゼットは感じる。
暗黒街で寵を競っていた頃の修行のたまものなのか、素人男相手なら心が手に取るように読めてしまってどうにも駆け引きは興ざめだ。

「……本当に、何故こんな事をと僕は今でも父を憎んでいます。確かに、前国王は愚鈍な方だったかも知れないが、決して父や他の者が言うように悪い王ではなかったのに」
その言葉には悔恨(かいこん)が満ちている。
どうやら、相当ラーシュ皇子は自分の父親の事が嫌いらしい。

それもそうだろう。
王位についた途端、何人もの寵后をめとり酒池肉林に狂う狸。

この生真面目なラーシュ皇子がそのことをについて反感を覚えないはずがない。
私は慰めるようにラーシュ皇子の手をそっと取る。

「私が失敗して泣いているとき、前の王様はよく優しくお声をかけてくださいましたわ」

この一言がさらにラーシュ皇子の罪悪感をかき立てる。
もう一押しかしらと私はそんなラーシュ皇子を値踏みした。

「何も、親族全て皆殺しにする必要など無かったはずだ……」
「ラーシュ皇子……」

私は握った手に少し力を加える。
それに呼応するようにラーシュ皇子がじっと私を見つめてくる。
「あの時、第3皇子であるユーイン様だけの遺体が見つからなかった。ひょっとして生きて逃げ延びているのではないかと、当時父に反感を持つ者と協力して捜索はしたのですが見つからずじまいで……」
ひょっとして、ユーイン様が生きてることはばれているのかしら？
私は訝しげに思ったが、すぐにそれは杞憂（きゆう）だと悟る。
ラーシュ皇子は実直で演技に長けてない。
この辛そうな表情が演技ならば、主演男優賞はユーイン様ではなく、ラーシュ皇子に送られることだろう。
私はふぅっと息を吐いて首を横に振る。
「私は運に恵まれましたが……ユーイン様は……もう……」
生きている望みがないとは私は口にはしない。
……というより自分が口にするまでもなく、なんだかんだ言いつつラーシュ皇子の中で、ユーイン様は死んだ存在になっている。
生きていることを希望してると振る舞うくせに、なんとも偽善的なことだと思った。
「籠の中で平和に育った鳥が生きていけるほど、世の中は優しくはありませんから」
私の言葉にそうですねとラーシュ皇子は悲しげに微笑んだ。

実は今有名な血の簒奪王がユーイン様ですよと言えば、どんなお顔をなさるのかしら？
誘惑に狩られないでもないが、ここは沈黙するが吉だ。
ばらしたらきっと、ユーイン様のお芝居は台無しになってしまう。
私は暗い雰囲気を振り払うように微笑んだ。
「お気を落とさないでくださいまし、ラーシュ皇子。きっと皇子がそのように心を痛めてくださって、ユーイン様も浮かばれておりますわ」
「リゼット嬢……」
花の綻ぶような笑顔を向ければ、ラーシュ皇子の頬が紅くなる。
リゼットの手をぎゅっと握って顔を近づけかけ、はっと我にかえって慌てて手を離した。
「す、すみません。失礼なことを……」
くすくすと私が笑うと、ラーシュ皇子はさらに紅くなって慌てる。
「ラーシュ皇子って本当に面白い方ですわね。そうやってたくさん女の子達にヤキモキさせているんでしょう？」
「からかわないでください、リゼット嬢っ。僕は、そんなに気が多くありませんっ」
意地悪を言う私に、ラーシュ皇子はムッとした顔をした。
ふて腐れた顔が子供っぽく、これがご婦人方に好評なベビーフェイスという奴なのだろう。
狙ってやっているわけではないだろうが、高等テクニックだとリ

ゼットは初めてラーシュ皇子に感心する。
ラーシュ皇子は紅い顔のまま視線を泳がせてぼそりと答えた。
「その、好きな人は一人だけで……」
私は「まぁ？　」とわざとらしく驚いた顔をして、口元に手を添えてひっそりと尋ねる。
「それは初耳ですわ。一体誰のことですか？　リゼットだけにこっそり教えてくださいまし？」
ラーシュ皇子は狼狽えて一瞬躊躇したが、一度目を伏せた後真面目な顔をした。
「二人だけの秘密ですよ？」
そしてラーシュ皇子は内緒話をするかのように、私に囁（ささや）いたのだ。
好きなのは貴方ですと……。

揺るがない炎

その日は雨が降っていた。

肌寒さは冬の訪れが近いせいだろう。

人気のない中庭を見つめて私は微笑む。

あの日のことが、先日のように鮮やかに思い出せる。

あの方に初めて会った時のことを。

恥ずかしがって母のスカートの後ろに隠れる私を、あの方はじっと見つめていた。

そして言ったのだ。

そんなに隠れるほど、俺の顔って恐い顔してる？　って。

母は肩を揺らして笑い、私を前に引きずり出した。

ちっとも恐いお顔などしておりませんよと。

恐る恐る顔をあげた私の前には綺麗な女の子が一人。

どうして男の格好をしているの？　と聞けば、あの方の頬はみるみる膨らんで眉をつり上げた。

自分は男だと……。

皇子だと紹介されていたのに、何故あんな間抜けな質問をしたのだろうと私はおかしくて仕方がなかった。

それから機嫌をそこねた皇子にカエルをなげられたり、本を取られたり散々虐められたのに、どうして自分の心はこうも揺るがない

のだろうと私は思う。

あぁ、きっと……そういうことなのだ。

私の気持ちが揺るがないのは。

その思考を遮るような背後で響く騒音に私は振り返った。

普段は華やかな王宮には怒号が飛び、物々しい雰囲気に慌てふためいている。

「兵を城門へと終結させよっ！　民は全て城へと非難させろっ」

戦装束で的確に指示を出すラーシュ皇子は、がたがたと震えて何もしない現国王に成り代わって神凪国の主となっていた。

誰もがこの希望の皇子に羨望の目を向けて、狂信者のように付き従っている。

血の簒奪王が神凪国へと宣戦布告し、もうそこまで迫っていた。

自室に戻りつかぬ間の休息をとるラーシュ皇子の元を私は尋ねた。

「リゼット嬢。貴方は国外へ逃げろと言ったはずだ……」

「いいえ、お側におりますわ。ラーシュ皇子……」

首を横に振る私にラーシュ皇子は困ったように微笑んだ。

「城には戦で傷付いた人もたくさん運び込まれるのでしょう？　だったら私は少しでも手助けをしたいと思います」

「リゼット……」

感極まった声に、墜ちたなと私は確信した。

いつの間にか馴れ馴れしく呼び捨てになっているし。
にっこり微笑んで私は少しお休みになってくださいと酒杯を差し出す。
「簒奪王の軍隊は強力だ。しかし、僕は必ず君を守るために勝ってみせるよ」
一気に酒杯を煽って自分を抱きしめるラーシュ皇子に私は目を伏せた。
「ええ、私も自分の主の勝利を心から信じておりますわ」
おかしくて、おかしくて笑いが止まらず……にぃっと口元が弧を描く。
これでやっと私はあの方の所に帰れるのだと。
「だから、少しでも戦力を間引いておかないと。治療なんてされて延命されては困ります」
そう言った直後にラーシュ皇子の身体が傾いてゆっくり床に沈んだ。
「リゼット？」
「毒ではないのでご安心を」
朦朧としながらこちらに伸ばされるラーシュ皇子の手を私は蹴った。
私に触って良いのはご主人様だけだというのに、べたべた気持ち悪いことこの上ない。

「本当に、ご主人様ったらお優しいんだから。さくっと殺しちゃえばいいのに。こんな間抜けな案山子の皇子に盛大な見せ場を作ってあげようなんて」

いくらでも殺す機会はあった。

でもご主人様が望む所はそうではなくて、だから私は仕方なしに従った。

「お休みなさい、おまぬけ皇子。次ぎ目覚めたときは最高に楽しいお遊びの始まりよ」

吐き捨てた台詞は既に意識を失ったラーシュ皇子には届かなかった。

本当に、人が最期の決め台詞言う前に意識を失うなんて失礼な奴だ。

ご主人様だったら絶対こんな事無いのにと、私は憮然としながら隠し持っていたロープでラーシュ皇子を縛り上げたのだった。

幕降りた劇場

ぴちょんっと水滴が墜ちる音を俺は静かに数える。

城は静まりかえっていた。

それもそうだ。

すでに幕は下りて観客は全て帰ってしまっている。

一人だけ寝こけて劇が終わったことに気付いていない間抜けな客を残して。

ぴくりと動くラーシュ皇子の瞼に、そろそろかと俺は椅子から立ち上がった。

「いよう、ラーシュ君。お久しぶり〜。お目覚めいっかがかなぁ？」

快活な俺の声に、寝ぼけたラーシュ皇子は何度も瞬きをした。

いきなり薬を盛られて、気がついたら地下牢なのだから動揺する気持ちも解らないでもない。

猿ぐつわをしているせいで、文句はふごふごとしか聞こえないが言いたいことはよく解った。

「ははぁ、俺が誰だって？　そうか、そうか。かの噂の簒奪王がこんな美しいお兄さんで驚きだろう」

恭しく一礼をとる俺にラーシュ皇子は目を見開いている。

きっととんでもなく厳つい男を想像してたんだろうなと表情で俺はすぐに解った。

血の簒奪王って肩書き……そんな雰囲気するし。

「ご主人様、皆さんそろそろお揃いですが？」

会議が始まりますから、急いでくださ～いと暢気なリゼットの声が地下牢に反響した。

うわ、ひょっとして修羅場か？と俺は一瞬思ったが、ラーシュ皇子と違ってリゼットの方に全く痴話喧嘩する気がないので期待した展開は何もなかった。

ちょっと切ないラブロマンスが見たかったとは鋏が恐くてとても言えないが。

『……っ！』

「あれれ、リゼット。どうやらラーシュ君は何か言いたげだぞ？」

猿ぐつわを外してやれば、ぷはっと息を吐いてラーシュ皇子は怒鳴った。

「リゼット！　どうしてっ？」

反響する声の五月蠅さに俺が耳を押さえて顔をしかめると、にっこり笑顔のリゼットも同じように耳を押さえている。

何か気休めの一言でも言ってやれよと俺は視線で促したが、リゼットは無視。

悲しい、寂しすぎると俺は渋々解説役を引き受けることにした。

「どうしても、何も……。俺が送り込んだ間諜だからだろ」
「本当におまぬけさん」
鬼のようなリゼットの言葉に、ラーシュ皇子は打ちのめされる。
お気の毒と思いつつも、俺は酷い現実を淡々と告げた。
「さすがにさ、俺もここまで上手く行くとは思ってなかったよ。純情な青年を弄ぶ薄幸の少女大作戦っ！　全て俺の予定通りに事態が転がるなんて、運命は俺の味方してるとしか思えない」
「ご主人様、まさに神って奴ですねっ！」
ラーシュ皇子は言葉もないようだった。
初恋の女にここまで騙されたら俺だったら女性不信になって間違いないだろう。
「全く駄目だよ、ラーシュ君。恋心なんかで油断しちゃ」
「ご主人様の仰るとおり！　確認もせず飲食物を口にするなんて」
ねぇっと俺とリゼットは微笑みあう。
薬のせいで昏々と眠り続けるラーシュ皇子を、リゼットは隠し部屋へと隠した。
王族しか知らない隠し部屋なので、誰も気付きやしない。
忽然と消えたラーシュ皇子に、当然城の皆は一人とんずらかと激怒した。
そんな所へ前王の息子である俺様登場……。
圧倒的な兵力を兼ね備える俺に対し、精神的な柱を失った神凪国

の兵士達の心はあっさり折れてしまった。
もともと現王は簒奪(さんだつ)者であって王の資格など無かったのだと、既に買収済みの間者達のダメ押しの先導により、主を無抵抗で売り渡す罪悪感も消えたのだろう。

あっさりと門は開かれ、俺は懐かしの我が家に悠々と戻ってきた。
無血開城達成、大団円である。

ラーシュ皇子以外は。

良いお勉強になったねと、笑う俺とリゼットにラーシュ皇子の中で何かが切れたようだった。

「巫山戯るなっ！　リゼット、嘘だと言ってくれ」
「申し訳ございませんが、ご主人様がいらっしゃる所でリゼットは嘘はつけません」

どうでもよい方の前だといくらでも嘘を付きますがとリゼットは笑う。

リゼットに文句を言っても濡れ手に粟だと悟ったのか、ラーシュ皇子は矛先を変えて壮絶な表情で俺を睨んだ。

「お前なんかに、お前なんかにっ、この国を玩具にする権利などっ……」
「権利？　権利ならあるぞ。だって、ここ元々俺の国だし」

まだ解ってないのかこいつと俺は呆れた。
いくらなんでも鈍すぎる。
少し頭を働かせれば、何故こんなにも予定通りに事が進んだのか

解りそうなものなのに。

「お前、真剣に阿呆だろ？　俺はさっき久しぶりだって言ったぞ」

そこまで言ってようやくラーシュ皇子は悟ったようだ。

内部事情に何故俺がそこまで精通しているのか。

何故王族しか知らない隠し部屋の存在を知っているのか。

「確かに随分経ってるけど、俺は一目でお前があの狸の息子だってわかったってのに」

「ユーイン・ハイエル・神凪っ……」

「ご名答……って、ちょっと気付くの遅すぎるだろ？　なぁリゼット俺の顔って、そんな記憶に残らないほど印象薄い？」

「ご主人様のお顔が美しすぎて、直視出来なかったんですわ！　この案山子」

それなら仕方ないかと俺は納得しておく。

綺麗なお姉さんに顔を忘れられれば辛いが、こんな暑苦しい男に覚えていて欲しいとは思ってないのだ。

鬱陶しいし……。

「本当に大変だったよ。お前の親父に俺の親族は皆殺しにされるわ、暗黒街でリゼットと二人泥水すすりながらはい上がってくるわ。ようやくここまで来れた」

ちくちくと俺はラーシュ皇子に苦言を呈する。

先ほどまで怒り狂っていたラーシュ皇子がどんどん消沈していくのが解った。

先にやったのは自分の親父なのだからと。

「リゼットに聞いたよ。お前、あの狸に反して俺を捜して保護する為に兵を出してくれたんだって？　余計なお節介嬉しすぎて涙が出るわ」

リゼットの報告で俺はあの時の執拗な追手の正体にようやく気がついた。

追手にもはやこれまでと苦渋の決断に迫られた臣下に、俺は自害を申し出られた。

実はその追っ手の正体が保護しようと捜していた捜索隊だと、あの時の俺達が想像できるはずもない。

「目の前で親父を惨殺された俺が今さら保護しますなんて信じられると思ったか？　その兵の中にお前の親父の手の者がいないとお前は断言できるのか？」

こいつが余計な指示を出さなければ、俺は臣下と共に辺境に逃げ延び、リゼットは狂うこともなく時期を見計らって実家に帰って幸せな人生を掴んでいたはずだ。

こんな血なまぐさい人生を歩まずに。

「おかげで毎日、毎日俺達は追手の影に怯え、結局取り返しがつかなくなっちまった」

今さら言ってもしょうがないがとにっこり微笑むとラーシュ皇子は呆然としていた。

「さて、長い思い出話ももういいだろう。城の外で皆お待ちかねだ」

俺が猿ぐつわを戻して、リゼットがラーシュ皇子を繋いだ鎖を引

く。

「王と国民を見捨てた裏切り者の皇子をな……」

抵抗する気もないのかラーシュ皇子はリゼットにずるずると引きずられた。

城門まで来ると俺は鎖を外し、ラーシュ皇子を門から蹴り出す。

「俺とリゼットが味わった地獄をお前も少し味わうと良いさ」

がこんと鈍い音を立てて重厚な城門は閉ざされたのだった。

ラーシュ皇子を外に放りだして。

蝶舞う庭園

ふふん、ふふんと相も変わらず調子っぱずれなリゼットの鼻歌が響く。

それに合わせるようにシャキン、シャキンと響く鋏の音。

「なぁ、リゼット……」

「なんですか？　ご主人様っ」

「俺は薔薇の剪定を頼んだはずだが？」

見苦しくないように、薔薇の花はある程度間引かなければならない。

だというのに、先ほどからリゼットは花をちっとも間引いてない。

じゃぁ、あの鋏の音はなんなのかと思えば聞かずとも足下を見ればすぐに解った。

真っ二つに切断された蝶が散らばっている。

「だってご主人様、こいつら図々しいんですよ？　私のご主人様の薔薇から勝手に蜜をすすったりして……許せませんっ」

しゃきんっとまた無惨に蝶が一匹真っ二つになった。

まぁ、いいかと俺は背伸びをする。

ほんの数ヶ月前の激動が嘘のようにのんびりとした日々が流れていた。

神凪国に戻り、王として即位した日常はそれなりに忙しくはある

が、それでも今までの忙しさに比べれば雲泥(うんでい)の差だ。
この程度の忙しさなど、俺の基準から言えば忙しいの範疇(はんちゅう)に入らない。

だからなのだろう。
このどうにも慣れない気だるさは。

リゼットもどうやら同じように感じているらしい。

にこにこと笑顔を浮かべてはいるが、どうにも精細を欠いていた。
俺の記憶の中にあるあの始まりの日の笑顔には遠く及ばない。

「祭りの後の虚しさって奴かな？」

だとしたら、いつかはこの空虚さも当たり前になって解らなくなるはずだ。
きっと淡々と毎日は流れていく。

「そういえばなぁ、リゼット。この間の大臣の話……お前どう思う？」

俺の后や寵后候補の話だ。
年頃とあって次から次へと舞い込んでいるのだが、どれも同じような女で正直誰でも良いんじゃないだろうかと俺は思い始めていた。

まぁ、聞いた所でリゼットは狂っているので興味がない話かと俺が苦笑すると、再びシャキンっとリゼットの鋏(はさみ)が鳴った。

鋏から切断し損ねた蝶がヒラヒラと逃げるように青空へと舞い上がっていく。

「あ～ぁ、逃げちゃいましたね。ご主人様」
てへっと笑うリゼットに俺は目を見開いて固まった。
リゼットの鋏が獲物を逃がすのを初めて見たからじゃない。
その手が一瞬だが震えたのを見てしまったから。
「ええと、何の話でした？　私ぼんやりして聞き逃してしまって」
「いや、もういいんだ。リゼット……」
俺はとんでもない思い違いをしていたことに気がついた。
どうして今まで気がつかなかったのだろうと、どんなに後悔しても遅すぎる。
「何がいいんですか？　途中で言うのをやめるなんてすっきりないから気持ち悪っ……」
ぱたぱたとリゼットの頬を涙が伝う。
「あれ、変ですね。急性花粉症？　私、薔薇の花粉に弱かったんでしょうか？」
「……そうかもな」
違うと言いたかったのに、俺は別の言葉を口にした。
リゼットが必死に守ろうとしている秘密を俺が軽々しく暴いて良いはずがない。
もういいなどと口にするべきではなかった。

リゼットの意地に最後まで付き合ってやるべきなのだ俺は。

「なぁ、リゼット。俺良いこと思いついたんだけど」

「何ですか？　ご主人様っ」

鋏を拾い直してポケットに終い、微笑むリゼット。

俺もにっと満面の笑みを浮かべる。

「俺が城を取り戻してハッピーエンドって、ちょっとありきたりすぎやしないか？」

「名作が名作たる所以は万人に愛される王道だからではないのですか？」

これ以上何を？　と小首をかしげるリゼットに俺は高らかに宣言した。

「悪役は、最後まで悪役らしくやりたい放題やろうぜって事だ」

さぁ、派手にやってやるぞと豪奢なローブを翻す俺に、リゼットは笑顔のままこてんと首をかしげたのだった。

終演の玉座

俺の宣言に臣下達は真っ青に青ざめている。
口をパクパクさせて、まるで池の鯉みたいだった。

「何か不満でもあるのか？」

嫣然（えんぜん）と微笑んで問えば、怒りに震える臣下の一人が立ち上がる。

「ご冗談にも程がある！　税を今までの１００倍などとっ」
「それは、そなたは私の命には従わぬと？　そう言うことだととっても良いのだな」
「当たり前だっ。こんな事なら前の方の王がまだ……」

勇気はあるが、馬鹿な臣下は最後まで台詞を紡げやしなかった。

言い切るまでに首と胴体がおさらばしたからだ。
リゼットの鋏（はさみ）によって。

吹き出す鮮血に、王の間は恐慌状態になった。

「さて、次はどういう法を作ろうか。なぁ、リゼット？」
「ご主人様の望むがままに。ご主人様がこの世のルールですもの」

絶好調に飛ばすリゼットは爛々と瞳を輝かせている。
それに俺は満足そうに微笑む。

「では、こういうのはどうだ？　１６歳以上の娘は全て私の物ということで」

臣下達の固まる姿がおかしくて仕方がなかった。
きっと俺が正気を失ったと思っているのだろうが、俺は何処までも正気だった。

「う～ん、でもこれだけではまだ足りぬな。そうだ、こういうのはどうだろう？」

俺はそれから滅茶苦茶な法を何十も作り続けた。
もちろん、そんな法など実際に実施出来るはずもない。

何度も、何度も臣下達から反乱が起こり、その度にリゼットの鋏の錆へと変わっていった。

そして今目の前には、城から蹴り出したラーシュ皇子がリゼットの鋏で縫いつけられている。

そのリゼットを睨む瞳には憎しみが見えた。
どうやら世間の荒波に揉まれて甘っちょろさが抜けたのか、いい面構えになっている。

これなら問題ないだろうと俺はすっと手を上げた。

「フィナーレだ、リゼット……」
「はい、ご主人様」

そう言ってリゼットが鋏を捻ろうとした瞬間だった。

ダンッと銃声が響いて、俺の口からかはりと鮮血がこぼれた。
震える手で胸を押さえて、真っ赤に塗れた手を俺は見つめる。

「ご主人様？」

ラーシュ皇子の首を薄皮一枚切り裂いた所で、リゼットの鋏が止まっていた。
信じられないような顔で俺の方を見ている。

「最後の、最後で……名も知れない端役にやられるって……阿呆らし」

目を細めて睨んだ先には震えながらしりもちをつき、白煙を上げながら銃を握った臣下の一人がいた。
そのまま俺はばったりと床に倒れる。

流れたおびただしい血が長い金髪を汚していった。
リゼットの悲鳴が聞こえる。

鋏を投げ出し、走り寄って俺の身体を揺らした。

「ご主人様っ、ユーイン様っ！　嫌です、置いていかないで。貴方がいないと、私、何のために生きたらいいのか解らないっ」
「リゼット。最後の命令だ……ここから逃げろ」

お前一人なら出来るだろ？　そう言えばリゼットは嫌々と首を横に振った。
仕方がねぇなと俺は苦笑いしてそのままがっくりと上げていた顔を落とした。

「ユーイン様っ！　ユーイン様？」

嘘でしょうっとリゼットはショックのあまり意識を失った。

ぱたりと俺の上に倒れ込むリゼット。

それを見た臣下達からは歓声が上がった。

これで暴帝はいなくなった、ラーシュ皇子万歳と……。

何とも都合のいいこったと俺は心底思ったのだった。

エピローグ

とある日の午後の昼下がり。

「つーわけで、めでたし、めでたしってな具合でどうよ？　ラーシュ皇子……じゃなくてラーシュ国王」

目の前で神凪国の王に即位したラーシュ皇子の手がぶるぶる震えている。

バキリと嫌な音が鳴って羽ペンが折れ、インクが書類に盛大に飛び散った。

あぁあ、大事な書類が台無しと俺は肩を竦める。

「何故に、生きておいでで？　ユーイン・ハイエル・神凪っ……」

「何故にってそりゃ、またあんたが騙されたからじゃない？」

懲りないねぇと笑うとラーシュ皇子はダンと執務用の机を叩いて立ち上がった。

「そう怒るなよ、俺もちょ～っとはやりすぎだったかなって思ってるんだ。リゼットにも黙ってたせいで、あの後ネタバレしたら鋏は投げるわ、暴れるわの大惨事で」

俺が本当に死んだと思ったリゼットの怒りは凄まじかった。

もう金輪際、リゼットに隠し事はやめようと思う。

「どうして、あんな事をする必要が？」

「だってさぁ、俺が成り上がろうって思ったのって、よくよく考え

ればリゼットが幸せに笑えるようにってはっずかしい理由の為じゃん？」
「じゃんって知るか、そんなのっ！　疑問系で僕に聞くなっ」
惚気るなと怒るラーシュ皇子は、まだリゼットのこと少なからず引きずっているようだ。
あんなに騙されて何故？　と俺には理解不能。
しかし、これはこれで面白い。
俺は徹底的に惚気（のろけ）てやることにした。
「せっかく何もかも取り返したのに、リゼットはちっとも幸せそうじゃなかった。今思えば恐かったんだろうな……」
俺が神凪国の王になって、后を迎えて……。
じゃぁ、リゼットの居場所はどうなるのか？
いつ要らないと言われるのだろうとずっとリゼットは怯えていたのだ。
俺は自嘲（じちょう）的に微笑む。
「俺はリゼットが初めて人を殺したときから壊れて狂ってるんだって思ってた。でも本当はそうじゃない……リゼットはずっと正気だった」
恐がりで、引っ込み思案で本音がなかなか言えないのは昔のままだ。
なのに、俺のためにリゼットは狂ったふりを続けていた。
「狂った馬鹿女のふりをしていれば、責任を感じて俺が自害なんて

しないってリゼットは思ってたんだよ」

そのために、リゼットの手は血に汚れてしまった。

ずっと側にいたのに気がつかなかったなんて俺もラーシュ皇子の事は笑えない。

とんだ大間抜けだ。

「何がご主人様の前では嘘がつけませんなんだか。嘘ばっかりだ」

本当に、どうしようもない馬鹿女だと俺が笑うと、ラーシュ皇子は苛々しながら足を踏みならし胡乱な目を向けていた。

「つまりは、こういうことか？　あれは壮大な茶番劇だったと？」

リゼットが城にいても幸せそうじゃないので、王様を辞めるための大作戦。

やめま～すと簡単に辞められないもんだから、色々手間がかかって大変だったと俺は溜息をつく。

「エキストラの演技が下手くそで、いつばれるかとヒヤヒヤしたっての。あ、でも皆がエキストラってわけじゃないんだぞ？　エキストラは銃を撃った臣下の人と、俺の遺体と気絶したリゼットを運んだ人だけで……」

「そんなことは解ってるっ！　あんたは自分の茶番劇のためだけに、何人もっ、何人もっ自分の臣下を殺しっ……」

「は～い、世間の荒波にもまれてちったぁ男らしくなったんだから、そういう形だけの正義感はやめましょうねぇ、ラーシュ国王」

ラーシュ皇子はうっと詰まった。

もしリゼットが殺さなくとも、自分が国王に戻ったら始末しようと思っていたからだ。

城から去ってラーシュ皇子は平民として寂れた村に居着いて現実を目の当たりにした。

自分は今まで何を見てきたというのだろうと衝撃を受けた。

善政を心がけたつもりで、臣下の悪行の一つさえ見抜けていない。

自分の知らない所で高額の税がかけられ、どれだけ汚職が蔓延しているか皇子の位を失って初めて気がついたのだった。

「でも、僕は貴方のやりようは認められないっ」

「だったら、自分のやりようで頑張りたまえよ？　ラーシュ国王。そのために戻ってきたんだろうが……」

よかったねぇ、復職できてと俺が笑うとラーシュ皇子は頭を抱えて唸っていた。

「貴方の為に僕は盛大に国葬まで開いて……」

「あのねぇ、僕ちゃん。前にも言ったけど、きっちり確認はしようね」

一体何のためにとぶつぶつ呟くラーシュ皇子。

ちょっとは頭が柔らかくなったかと思ったのに、相変わらず真面目で暑苦しいガキだと俺は辟易して背を向ける。

そんな俺の背に慌ててラーシュ皇子は質問を発した。

「最後に一つだけ。どうして僕の父を処刑せず、幽閉だけですまし

たんだ？」
「なんでかねぇ。殺そうと決めてたはずなんだけど……」
自分の全てを壊したあの極悪狸に地獄を見せるために生きてきたはずだった。
泣いて許しを請う姿を見て、同情して許した訳ではない。
「ただ、俺の目的って何だったっけ？　って思ってな。こんな狸のことなんて、本当にどうでも良かったんだなぁって目の前にして解ったし」
だから、お前に恨み買ってまで殺すこと無いなって思いとどまったと苦笑すれば、ラーシュ皇子はしばらく沈黙してありがとうと声を絞り出した。
うわ、辛気くさいと俺はげんなりする。
こういう真面目君とはやっぱ一生相容れないのだ。
さて、悪役は退散、退散と俺は逃げるように城から去る。
ようやく全てに結末がついて、なんか身体が妙に軽くなった。
変装のためにばっさり髪を切ってしまったのも原因だろう。
リゼットは反対したが、さすがに変装無しでこの国をうろうろするのは厳しい。
見上げる空が目の痛いほどに青かった。
船着き場へ向かうと、そこには当たり前のごとくリゼットの姿。
「遅いですよ、ユーイン様っ」

「すまねぇ。きっちりけじめつけてくんのに時間がかかって」

相変わらず虫ずの走る真面目君だったと俺が顔をしかめると、リゼットも顔をしかめる。

お互い、どうにも真面目君は苦手だ。

「じゃぁ、行きましょうっ、ユーイン様！　何処に向かわれますか？」

「そうだな、とりあえず南の方にでも行ってみっか？」

リゼットが俺に手を差しのばし、俺はその手を取った。

じゃぁ、また一から始めますか二人で！

やっぱ俺達はこうでなくっちゃと笑えば、リゼットは花が綻ぶように笑ったのだった。

ＥＮＤ……。

エピローグ（後書き）

完結です。
全話一日で書ききっただけに、短いなぁって感じます。
３枚の妄想イラストを元に書いてるんで、何十話にもするのは
さすがにちょっと厳しいかなと。
入れようと思えば入れられるんですが、
また編集したくなったら間にちょこちょこ話を入れ込んでいこうと
思います。

最終話まで読んでくださり、ありがとうございました。

プロローグ　楽園は遠く

よう、皆久しぶり。
・・・・・・って、誰に挨拶してるんだろうかな？　俺は。

幸薄いラーシュ君に国を下げ渡して、リゼットと逃避行を始めてはや半年。
俺たちは、ほとぼりがさめるまで、バカンスでもしゃれ込もうかと思っていた。
燦々と降り注ぐ日差し、きらめく青い海。
のんびりと肌を焼きながら、シャンパンを手にする俺。

そういう予定だったのだが・・・・・・。

「・・・どこでどう間違ってこうなったんだよ、リゼット」
「思いっきり間違えさせられてしまいましたね、ユーイン様」

現実の俺とリゼットは、暗い夜の海の上。
はぁっと、重いため息をついてナチュラルハイポーズ。
同じくそのポーズを取らされている人間が、ずらりと横に一列に並ばされていたりする。

「おい、おめぇら少しでもおかしな真似をしたら、どうなるか解ってるだろうな？」

厳つい男共がナイフを片手に、恫喝していた。
そんな男に俺とリゼットは「どうなるってんだよ？　ああん？」と、表情だけで突っ込む。

神凪国から、南の楽園「陽菜国」行きの豪華客船に乗船した俺たちは、順調に航海を進めること１０日。
リゼットの黒い笑顔と、飛んでくるハサミにおびえつつ、船の上でご令嬢とのひとときのアバンチュールを楽しんでいた俺だが、それは深夜に突如終演を迎えたのだった。

遡ること3時間前・・・・・・。

「ユーイン様っ」

バタンっと乱暴に、リゼットが部屋のドアを開けて飛び込んでくる。
それと同時に、一瞬ピクリと眉を跳ね上げたのを俺は見逃してない。

きゃぁっと急な来訪者に驚いて悲鳴を上げたご令嬢は、慌てて着崩れた衣服をかき寄せ、ぱたぱたと部屋から出て行った。
おしい、もうちょっとだったのにと俺は項垂れる。

「これは、大変失礼いたしました。ユーイン様・・・・・・どうもお取り込み中のようでして」
「その笑顔と手元の獲物が、どうにも反比例している気がするのは俺だけか？　リゼット」

リゼットは手に持つ巨大なハサミを、くるりと回転させる。

しゃきんっと音を立てたハサミに、一瞬リゼットの姿が死神に見えた。

俺は何も間違ってない。据え膳食わぬは男の恥だ！
だいたい、誘ってきたのは女の方で、食べてくださいと言われて断るのも、もったいない。
恐れるなユーイン・ハイエル・神凪！　全ての男の尊厳のために魔女と戦うのだっ。

そう心は決起した俺だったが、身体は床に膝をついてぺこりと頭が下がっていた。

「すいません、出来心でございました」

口から出る言葉でさえ、心と反比例。
あぁ、男ってなんて悲しい生き物。

「次やったら去勢ですよ？　ユーイン様」
「にっこり笑顔で恐ろしいこと言うな！　俺の美貌の種がなくなるのは、全人類に対する遺伝学的損失だぞ」
「あら、その方が不幸なご婦人が増産されないだけに、世界の平和の為なのでは？」

うふふっと微笑むリゼットの目は、ちっとも笑っていない。
これは・・・・・・まずい。リゼットは相当怒っている。

なんとか話をそらさなければ、俺がそう思ったときだった。

ドン、ドンッという音とともに揺れる船体。
思わずよろめくリゼットの身体を支え、俺は怪訝な顔をする。

「砲撃か？」
「あぁ、そうですユーイン！　大変なことになっちゃいそうですよ」
「そうだろうなぁ。どう考えてもお祭りの花火ってわけじゃないだろうし」

砲撃はさらに続いている。
豪華客船に深夜の砲撃となれば、考えられることは一つしかない。

『海賊だぁぁぁぁぁ！！！』

何を今更・・・・・。
響き渡った喧噪に、俺はゆったりと床に脱ぎ散らかしていた服を拾い上げた。

海賊稼業も大変だ

海賊というものの行動は、意外とお約束がある。
まずは威嚇で停船命令。
その後はお宝を物色、ハイさようならというパターンだ。

しかし・・・・・・。

「なんか変だな。あいつら一体何をもたもたしてるんだ？」

俺は怪訝な顔で、リゼットに耳打つ。
船は大陸沿いで航海しているし、昨今の海賊被害を重く見た国々が定期的に軍艦を巡回させている。
海賊の襲撃があった直後に、信号弾が打ち上げられていたし、もたもたしていれば足がつく恐れすらあるというのに。

「お頭、地下の宝物庫に物はありませんでしたぜっ」
「馬鹿野郎！　この船にあれが乗ってんのは間違いねぇんだ！　さがせお前らっ」

響く怒声の方向へ、俺は視線を走らせた。
命令を偉そうに飛ばしている海賊の親玉は、以前に人相書きで見た覚えがある。
お宝を奪えば乗員は全て皆殺し。
ブラッディーブルー・・・・・・奴が通った海路は真っ赤に染まった。
交渉は一切受け付けない、残虐な海賊の一人として有名なキャプテン・アドマックだ。

「お前とどっちが有名人だろうな？　リゼット」
「そうですねぇ、最近リゼット落ち目ですから。自信ないです」
茶化す俺に、リゼットは人気ってすぐにさがっちゃうから困っちゃうと、全く困ってなさそうな声で淡々と答える。
「海賊たちはどんなお宝を探してるんでしょうね？　ユーイン様」
「さぁな。何のお宝だか知らないが、その後俺らがどうなるかの方が大問題だろ」
あの海賊の親玉が本当にアドマックならば、目当てのものが見つかった後に、待っている俺たちの末路は処刑だけだ。
海賊の人数はざっと見積もって、５０人ほどというところ。
乗客を盾にしつつ戦ったとしても、さすがに俺とリゼットだけでは厳しい。
船の護衛として乗船していた兵士はことごとく殺されたようだし、後のへっぽこ貴族の優男共では相手にすらなりはしない。
ここは脱出する隙を伺おう。
そう、リゼットと俺が顔を見合わせた時だった。
世の中には、どうしようもなく空気が読めない馬鹿はいる。
「お、おい。お前達っ、ご婦人達だけでも解放したらどうだっ」
ひっくり返りながら上がる声に、俺とリゼットは胡乱な目を向けた。
癖のある黒髪を後ろで一つにまとた、灰色の瞳の２０代後半の青年が気色ばんでいた。

腰には装飾過多の、実践的ではないお飾りのレイピア。
勇者と書いて無謀と読む典型的な男に、俺とリゼットはあちゃぁと顔を押さえた。

「ほぅ、貴族のお坊ちゃんが、このアドマックにもの申すというのか」

ゲラゲラと周囲の海賊達から嘲笑があがる。
意地悪く口の端をつり上げ、アドマックは腰から柳葉刀を引き抜いた。

「この世間知らずのお坊ちゃんに、この俺が直々にお稽古をつけてやろう」
「ひっ・・・・・・」

アドマックが突きだした柳葉刀を、危うくよけてぺたりと尻餅をつく男。
震える手でレイピアを抜こうとして、鞘に引っかかって抜けないという体たらくに、俺はどうしたものかなと頭を回転させた。

正直、あの馬鹿坊ちゃんが犬死にしたところで興味はない。
しかし、ここで恩を売っておけば、後々何かしらの役に立つかもしれないとも思った。

リスクとメリットを天秤にかけ、俺はにぃっと口元をつり上げる。

「リゼット・・・・・・」
「はい、ユーイン様」

俺が名を呼んだと同時に、リゼットは動く。

メイド服の下から折りたたんでいたハサミを取り出し、身を低くして地面を縫うように疾走。
男に向かって突き刺さろうとしていたアドマックの柳葉刀を、リゼットは下段から跳ね上げた。
ガンっとはじかれた柳葉刀はくるくると回転して高く舞い上がり、ずさっと地面に突き刺ささる。
驚くアドマックの首には、リゼットのハサミが押し当てられていた。

「そこのお坊ちゃんのなまくらと違って、私の獲物は本物ですよ？」

にっこり告げるリゼットに、アドマックは引きつった笑みを浮かべる。
さすがはリゼット大先生と、パチパチ称賛の拍手を送りつつ、俺は木箱の上にあがる。

周囲の視線が一斉に俺に集まった。

「さて、海賊諸君。君たちの親分の命は今風前の灯火なわけだが、どうする？　ここは一つ暑苦しい海の男の友情掲げて、俺の侍女と死闘を繰り広げてみるか？」

傲然と言い放つ俺に、海賊達は誰も動かない。
素直なことは、大変よろしきことかな。
誰だって命と引き替えに、こんな悪徳ひげ面親父を救いたいとは思わないだろう。
予想通りの反応に、俺はよしよしと頷く。

「胴体と首がおさらばするのもよし。お宝もって陸に上がり、第二の人生を買い直すもよし。まぁ、選択は自由だけどな」

にやりと意地悪く笑う俺に、海賊達は顔を見合わせる。
次第にそろそろと柳葉刃を降ろす者が出始め、慌ててそれに習って従う者多数。
堰を切ったように、わぁぁっと歓喜の声を上げ、我先を競って海賊達はお宝に殺到し、奪い合いが始まった。
もともと昨今の海賊など、財政難の水夫崩れがほとんどだ。
一生を海で終えるなど今時流行らないと、俺は我先を争う海賊達の光景に肩をすくめる。

「行くぞ、リゼット」
「はい、ご主人様」

アドマック以外の海賊達が、全て海賊船に移動したのを俺は確認し、かかっていた跳ね橋を足で蹴って海に落下させる。
リゼットは素早くアドマックを縛り上げると、曳航するためのつながれていたロープを、ことごとく切り飛ばしていった。
お宝の奪いあいに夢中な海賊達は、そのことに全く気がつかない。
阿呆かと呆れつつ、俺とリゼットは全ての枷が外れると、にっこり微笑んで操舵室に手を振った。
船長はこくこくと頷き、おもいっきり舵を右に切る。

船体がぶつかり、船がどんっと揺れ、海賊達は事態に気がついたが既に遅い。

再びこちらに移ろうとする海賊は、全てリゼットの鋏によって切り捨てられた。
俺は船に備え付けられた大砲を、海賊船のマストに照準を合わせて発射。
轟音と共に火を噴き、砲弾は放射線を描いてマストに命中。

めきめきと嫌な音を立てて、ぶち折れていくマストに、海賊達は半狂乱となっていた。

「あれ、直せないだろうな」

このまま身動き取れず、そのうち軍艦にでも発見されるしかない。ご愁傷様と、俺は目先の欲におぼれた海賊達の末路に、手を合わせておいた。

悪銭身につかず、昔の人はよく言ったもんだね。

うんうんと俺は、しみじみと頷いた。

生き残った水夫達が慌てて帆を張り直し、豪華客船は夜風に押されて、みるみる内に海賊船から離れていく。

乗客達はようやく命の危機から解放され、安堵しへなへなとその場に座り込んでいた。

「さて、これにて一件落着。めでたし、めでたし」

夜空にはぽっかり丸い月が頭上に浮かぶ。

ふぁぁっと急激に眠気がこみ上げた。

あくびをし、俺はもう一度寝直すかと部屋に戻ろうとする。

「ユーイン様、このひげ親父はいかがいたしましょうか？」

「そーだなぁ・・・選択肢その1、海に投げ入れてサメの餌。選択肢その2、海に投げ入れて藻屑となる、選択肢その3、海に投げ入れて・・・・・・」

「海に投げ入れる以外は無いのかっ！」

どれをとっても死刑宣告である俺の選択肢に、アドマックからクレームがあがった。

俺はめんどくさそうな表情を浮かべる。

「どっちにしたって遅かれ、はやかれだろ？　このまま陸に上がっても、縛り首なんだから。ここはいっちょ、海賊の親分らしく華々しく海で散ったほうが、「海賊アドマック、海に消え行く」みたいに、俺の日記に一本話も書けそうじゃないか。絶対しばり首より、そっちの方が、俺のサクセス絵日記的に体裁が良いと、俺は思う」

「リゼットはどちらかというと、「海賊アドマックＶＳ鋏の魔女。海上の決戦」でもよろしいかと思いますが。ユーイン様の絵日記に、私が登場できちゃいますし・・・・・・というより、ユーイン様？　本心は面倒だから、さっさとこのひげ親父を、海に放り投げてしまいたいだけなんでしょう？」

「あたり前だろ。他に何の理由が存在する価値があるって言うんだよ」

「あ、あのお客様・・・・。」

おずおずとかけられた声に、なんだよと俺は振り向く。

そこには困った顔の船長と、怒りをたたえた生き残った水夫一同。

なんだか厄介なことになりそうな空気に、俺ははぁっとため息をつくしかなかった。

暴露ゲーム

チェスというのはなかなかに奥が深いゲームである。
白黒の６種類、１６個の駒を使ってキングを取るゲームなわけだが・・・・・・。

「チェック・メイト。これで俺の２０戦２０勝だなアドマック」
「ちょっと待て。先ほどの手はやはり無かったと言うことで」
「待ったは3回まで。しかも俺駒抜いてやってるんだぞ・・・・・・」

俺とアドマックは懲罰室で、格子を挟んで向き合っていた。
間にはチェス盤があり、それを見下ろしアドマックは先ほどからずっと唸っている。

何故に俺とアドマックが、なれ合ってチェスなんかやってるかって？
それは、まぁ・・・・・・あの後、色々あったんだって。

人間というのは、仲間のためという理由で集団の暴力を正当化しがちだ。
自分こそは正義、どんな残酷なことも許される。
水夫達の今の気持ちを代弁すると、そういうところだろう。

「そんな奴、殺しちまえっ！」

どんどん鼻息が荒くなる水夫達から、アドマックへの暴行が声高に叫ばれる。
その一方的な高揚(こうよう)は乗客まで広がり、貴族達もまるでショーでも見るかのごとく、アドマックの末路(まつろ)を見届けようという感じだ。

そんな中、船長であるマートンだけが異を唱えていた。

「それは駄目だ！　アドマックはきちんと陸の上で裁判を受け、法によって裁かれるべきだ。私的感情で私刑を執行するなど、文明人としてあるまじき姿だ」

俺とリゼットは繰り広げられる言い争いを、胡乱な目で見つめていた。
どう見てもマートンの分が悪い。
マートンは困ったように、ちらちらと俺に視線を向け助けを求めている。
一体何を期待してるんだよ？　と、俺は口の端をつり上げる。
そもそも、マートンの行動はあきらかにおかしかった。
この状況なら、水夫達と一丸となってアドマックに制裁を加える側にいるべきなのに。
不要な反感を買い、立場を悪くしてまでアドマックを擁護(ようご)する要因が解らない。

「どうするんですか、ユーイン様？」

どちらでも良いと言いたげなリゼットに、俺はそうだなっと瞑目する。
正直、さっさとこんな問題を投げ捨てたい。

しかし・・・・・・。

「まぁ、ちょっと落ち着けよお前ら」

にっこり微笑む俺に、しんっと周囲は静まりかえった。

窮地(きゅうち)を脱出する機会を作った俺の発言権は、非常に大きい。

俺はすたすたとマートンの前に歩み出て、腰に手を当て水夫達に対面した。

「俺は船長の意見に賛同だね」

どよどよと周囲がざわめき、水夫の一人から異があがる。

「あんた、さっき海に投げ捨てろって、言ってたじゃないか」

「気が変わったんだよ。ここでアドマックをリンチしたところで、死んだ奴らは戻ってこない。なら、アドマックをとりあえず生かしておいて、返ってくる物に期待した方が良いんじゃないか？」

俺は同意を求めて乗客達に視線を向けた。

俺の言わんとしたことを、計算高く察した乗客の一部は、口元を押さえ唸(うな)り始めている。

「アドマックが今までいくら稼いだと思ってるんだ。きっとどこかのアジトにため込んでるだろうよ。陸の上でじっくり吐かせて、お上に回収させれば、支払われる謝礼や慰霊金にも色がつく。その方がよっぽど建設的だと俺は思うね」

それが不要だというなら好きにすると良い。

どうする？　と俺が決断を迫れば、水夫達はばつが悪そうに振り上げていた拳を降ろした。

「船長だって、別にアドマックを擁護(ようご)してるわけじゃない。亡くな

った水夫達の残された家族の今後を考えてのことだろ？　本心は水夫達と一緒ではらわた煮えくりかえってるに決まってるじゃないか、なぁ？　船長」
「え、あぁ・・・・・・そうだとも」

なれなれしく俺が肩に手を回せば、マートンはしどろもどろ同意を返す。
寝耳に水の話でも、動揺しすぎだろう・・・・・。
もうちっと上手く芝居をしてくれよと、俺はばしばし肩を叩いた。
「そういうことなら・・・・・なぁ」
「俺だって、国にかみさんと子どもが・・・・・」

それでもまだ半数ぐらいは納得がいかなそうな顔をしていたが、とりあえず陸まではアドマックの処分を待ってくれそうな雰囲気になった。
感謝しろよと俺がちらりとアドマックに視線をやれば、まるで苦虫でもかみつぶしたかのような顔をする。
マートンは決定だなとうなずき、再び困ったような顔を俺に向けた。

「お客人には悪いが、陸に上がるまでアドマックの見張りをお願いしたいが・・・・・」
「あぁ、それはかまわない。ただし運ぶ食事は一等船室と同じ物と、年代物のワインぐらいはつけてくれよ。それぐらい色をつけてくれないと」

水夫に見張らせると、何がきっかけで感情が爆発するか解らない。
かといって、他の乗客達はこんな仕事引き受けはないし、アドマックに逆に人質に取られる可能性だってあった。

マートンが俺達に見張り役を頼むのも、当然の流れという物かもしれない。
まぁ・・・・・・とりあえず、事の成り行きは結論に達したわけだ。

乗客達はばらばらと自室に戻り始め、水夫達も各々の仕事へと向かい始める。

マートンは俺に深々と一礼し、再び操舵室(そうだしつ)へと戻ろうとした。
しかし一瞬立ち止まり、俺の方に戻ってくると、一枚の紙切れを俺の手に押しつけた。
俺は怪訝な顔をする。

「よろしくお願いします」

そして、再びぺこりと頭を下げてマートンは足早に去っていった。
俺は手の中の紙切れを確認した後、ひゅぅっと口笛を吹く。

「一体何のつもりなんだろうな？　あの船長は」
「ユーイン様？」

訳がわからず、こてんと首をかしげるリゼットに、俺は面白くなって来たんだと笑った。
やはり旅というものは、波乱に満ちあふれているらしい。
あまりにも平穏無事が過ぎるので、退屈していたところだったし、これはこれで悪くないと俺は思う。

かくして、アドマックの見張り役という大任を仰(おお)せつかり、俺とリゼットは現在に至るというわけだが・・・・・。

「さぁ、俺が勝ったんだから２０回目の暴露(ばくろ)大会いってみよう」

どうしようも手の打ちようがないチェス盤に、アドマックは２０回目の負けを認める。

ただぼんやり突っ立って、見張りというのも味気ない。

本来囚人とチェスで遊ぶなど、あってはならない事なのだろうが。

この懲罰室(ちょうばつしつ)には誰も近づいて来ようとしないし、ドアの前ではリゼットが見張りをしている。

中で俺が囚人になったアドマックと遊んでいたところで、見つかる恐れも、咎める者ない。

「けっ、もう話す事なんてほとんどねぇよ。俺の人生なんざ、どこまでいってもろくでもないことばっかだ」

「そうか？　俺はまだ話すべき事はあると思うねぇ。たとえば・・・・・・お前と船長の話とか？」

「別に・・・・・・あいつと俺は、何の関わり合いもねぇよ」

「ふぅん？　ま、お前がそういうなら、そうかもしれないよな」

にやにや笑いつつ、俺は言葉を濁すアドマックの次の言葉を待つ。

沈黙は長かった。

はぁっと重いため息をつき、アドマックはそっぽを向く。

「・・・・・・昔の話だよ。俺はとある港町の水夫の息子として生まれた。親父は嵐に遭い、物心つく前に亡くなっていたから、お袋が女手一つで育ててくれたわけだ」

よくある、お涙ちょうだい劇だなと俺は思う。

あいにく、そんなことで同情するほどの優しさは持ち合わせていないが。
何も茶々を入れずに話を聞く俺に、アドマックはさらに続けた。
「まぁ、生活は苦しかったわな。食うにも精一杯だってのに、お袋は余所から子どもを1人預かってきた。それがこの船の船長のマートンだよ」
なるほどねと、俺は適当に相づちを打つ。
どうりで、船長がやけにアドマックを庇いたがるたわけだ。
家族だしな？　と言う俺に、アドマックは口をへの字に曲げる。
「俺は正直迷惑だった。俺の食える分の飯がさらに減ったからな。娼婦の息子を預かってくるなんて、どれだけお人好しなんだとお袋に腹が立った。だから、俺はマートンに優しくなど一度もしたことがないし、家族だなんて言われても、そんな言葉知ったこっちゃなかった」
アドマックは、マートンとの関係をしきりに否定した。
しかし・・・・・アドマック自身は気づいてない。
厳めしい顔からは想像もつかないほど、過去を振り返る目は優しくなっていることを。
ひねくれても、つながりというものは簡単に希薄にはならないものだった。
「それから、しばらく経ってからだな・・・・・お袋が死んだのは」
アドマックの母親は、貴族の馬車にひかれ即死したらしい。
貴族の従者が不注意から起こした事故。

当然、残されたアドマックやマートン、親族、友人達は貴族に対し謝罪と責任を求めたが、「平民が何を言う」と一蹴されて終わった。

役所もまともに取り合ってくれなかったというアドマックに、そうだろうなぁと俺は半眼になって笑った。

役所など、袖(そで)の下でいくらでも黙らせば良いだけ。

世知辛い世の中である。

結局、事件はうやむやにされ、周囲の人々は「運が悪い。諦めろ」と、1人、また1人と抗議の声を消していったというわけだ。

「それからの生活はさらに大変だった。俺とマートンは死にものぐるいで働いた。丁稚奉公から、廃品回収から、金になることならなんでもやった。早朝から夜遅くまで働き、泥のように眠る。そんな毎日を繰り返し・・・・・いつしか大人になった俺たちは水夫になった」

マートンと自分の過去は、こんなもんだというアドマック。

「なるほどな。それで、今やお前は立派な海賊の船長様で、かたやマートンは貴族御用達の豪華客船の船長様か。対照的な人生だなぁアドマック」

「けっ、うっせぇよ。あいつは昔から頭が固くて堅実な奴だったからな」

自分と違って地道に努力し続けたんだろうよと、自虐するアドマックに俺は、還暦を迎えるひげ面のおっさんがすねても、ちっとも可愛くなくて不気味だと、冷静に突っ込んでおいた。

「さて、聞くべき昔話も聞き尽くしたし？　そろそろゲームもお開きにするか」

チェス盤を片付けようとする俺の手を、アドマックが待ったと掴む。
なんのつもりだよ？　と俺が目を据わらせれば、アドマックはにやりと笑った。
「坊主、もう一勝負といこうじゃないか？」
「やめとけって。あれだけ負けたんだから諦めろよ。それに、俺は賭けるものが無いような勝負は・・・・・・」
「賭けるものなら、まだあるさ」
怪訝な顔をする俺に、アドマックは服の襟元に首を突っ込み、首飾りのチェーンを引っ張り出した。
じゃらじゃらとトンボ玉が突いたそのネックレスの中央には、金色のネジ巻きがつながれている。
「俺が探していた宝のカギだ。まだ、この船の中に宝があるのは間違いないだろうよ」
海賊アドマックは残忍（ざんにん）な海賊だ。
襲われた貴族の船は、ことごとく皆殺し。
その後ゆっくりお宝を持ち帰る、それがスタイルだというのに、今回はあろう事か乗客を生かしたままで、お宝の回収を優先させた。
いつものスタイルを変えざるを得ないほど、狙っていた物が重要だったのか、それとも船長へ思うところがあったのか、俺には解らない。
「それで、お前は勝ったら俺に何を要求するつもりなんだ？」
「それは、もちろん決まっているっ」

この２０回繰り返された勝負と同じ条件を、アドマックは提示した。

俺は良いだろうと頷き、ゲームは再び始まる。

そして、２１回目のゲーム・・・・・俺はアドマックに負けたのだった。

眠れる少女

船倉の中はがらんとしていた。
めぼしいものは海賊達が、もっていってしまったのだろう。

「それで、ユーイン様。勝負に負けたのに、どうしてそのネジ巻きをもらったんですか？」
「さぁ？　アドマックが言うには、もう不要だからくれてやるだそうだ」

海賊船を失い、足が無くなった以上、獲物を運び出すことが困難なのだろう。
要求の念押しによこしたのだろうが、一体このネジ巻きにどれほどの価値があるかは疑問だ。

時間は深夜、見張りの水夫以外は眠りについている。
一時的にアドマックの見張りから抜けだし、俺とリゼットはお宝探しへと興じていた。

「お宝は、手違いでこの船に積み込まれたそうだ。随分のデカ物らしいから、ぱっと見で解らないはず無いらしいけどな」

ふむっと思案する俺の背後から、場違いなほどハイテンションな声が飛んでくる。

「はっはっは、ユーイン殿！　これしきの困難でくじけるようでは、まだまだですぞっ」
「・・・・・・アーサー」

俺は胡乱(うろん)な目でくるりと背後を振り返った。
そこには、あわやアドマックに殺されかけた貴族の馬鹿がいる。
こいつの名前は、アーサー・オブライエン。
俺たちが向かおうとしている陽菜(ような)国で、代々騎士を務める家系らしい。
どうやらリゼットに助けられたことに非常に恩を感じているらしく、アドマックとのチェス勝負の後に突如やってきたのだ。
それで、何故か俺達のお宝探しに同行している。
「冒険に苦難(くなん)はつきもの！　それを乗り越えたときにこそっ」
「冒険じゃねぇだろ。船底あさりだっつの」
「・・・・・・ユーイン様、やはり助けずに捨て置けば良かったですね」

俺とリゼットは顔を見合わせてため息をつく。
アーサーは先ほどから木箱をひっくり返しては、1人劇場を大げさに繰り返している。
はじめの頃こそ、この陰気な空気を吹き飛ばす役割を担(にな)っているが、さすがにだんだん鬱陶(うっとう)しい。

「おい、アーサー。俺らの精神衛生上の事を考えて、そろそろ退場してくれね？」
「何を言っているんだ我が親友よ。親友が困っているというのに、私1人がぐーすか寝てるわけには行かないだろう。苦難(くなん)は共有してこそ友情はさらに深まる」
「いや、全く深まらなくて良いから。むしろ浮き出て空に浮いたぐらいの関係が、俺はちょうど良いと思ってるから」
「まったく、ユーイン殿は照れ屋さんだなぁ。はっはっは」

全く話が通じやがらねぇと、俺は脱力した。
もういい、ここで無駄に体力使うだけ馬鹿馬鹿しい。
アーサーの事を極力視界に入れないようにし、俺はもう一度船倉を見渡した。

「船に確かに物は運び込まれている。しかし船倉には姿は見えず。答えは何だ？」
「答えは、船倉には運び込まれてないって事ですか？」
「ぴんぽん、ぴんぽん。正解だ、リゼット。だいたい間違って運び込んだ奴も堅気じゃないんだろ？　だったら、普通に他の荷物と一緒に船に積み込むはずもない」

アドマックに船倉を探せと言われ、ついつい乗ってしまったが、よく考えれば簡単なことだ。
誰も近寄らず、中身を見る恐れが無く、大きい物を安全に隠せる。
そしてチェックも入らず、なおかつ回収しやすいと言えば、隠す場所は一つしかない。

「お宝はここじゃないな。移動するぞリゼット」
「はい、ユーイン様」
「あぁ、ユーイン殿っ！　何処に行かれるのです？」

ドテンと散乱した荷物で転ぶアーサーを無視し、船倉を出た俺はアーサーに見えないように、足で蹴ってドアを閉める。
すかさず、リゼットがドアノブを動かないように針金でくくり、船倉からは「何故閉まったのだ」だの、「おのれ我が行く先を阻む魔物の仕業か」などと、意味不明なアーサーの叫び声が聞こえていたが、知ったことではない。

俺は船内図を頭の中に浮かべながら、迷うことなく目的の場所に足を進める。

目的の場所に着くと、俺は腰(こし)に手をあてさてっと後ろを振り向いた。

そこには真っ青な顔のリゼット。

「ユーイン様、よりによってここですか？」

「あぁ、だってここしか考えられないだろう？」

慰霊室(いれいしつ)・・・・・リゼットは腕を抱えて一歩後退した。

俺はそんなリゼットを、目を細めて見つめる。

「あれれ？　リゼットちゃんは幽霊(ゆうれい)でも怖いんですかねぇ」

からかう俺に、リゼットは狼狽(ろうばい)しつつも慎(つつ)ましやかな胸を無理矢理張った。

「な、何を仰(おっしゃ)いますか、ご主人様っ！　私は鋏(はさみ)の魔女ですよっ？　そんな・・・・・幽霊なんか信じてないんですからっ。目で見て触れないから、そんなものはいないんですっ！　絶対、絶対幽霊なんていないんですっ」

俺はふ～ん？　っと疑惑の目を向けそれ以上は突っ込まなかった。

動揺して俺への呼び方が「ご主人様」に戻ってることも、リゼットは気づいてないらしい。

「そういや、海と言えば幽霊とか魔物がつきものだよな。やはり海の上で亡くなると、帰る場所が解らなくて、そのまま彷徨(さまよ)うという・・・・・」

「ひっ・・・・・・・ぅ」

俺がにやにや笑うと、リゼットは恨めしげな顔をしつつも、そそっと俺の背中にはり付いて隠れた。

これ以上からかうと、後で恐ろしいのでこの辺でやめておくことにする。

俺はがたがた震えているリゼットに、やれやれと肩をすくめた。

死んだ人間が何をできるというのか？

生きてる人間の方がよっぽど恐ろしいと、今まで散々身にしみてきただろうに。

俺はリゼットを背中にはり付けたまま、重々しいドアをゆっくり開く。

開いたドアの隙間から冷たい空気が漏れだしてきた。

「思ったより、空気は悪くないな」

これなら探すのも苦労しなさそうだと俺は思った。

稀にだが、旅行先で亡くなった貴族などを、船で本国へ移送することがある。

当然長旅になるので、防腐処理は施してあるし、慰霊室には氷を大量に敷（し）き詰めて、室温を抑えるようには工夫されていた。

そのおかげなのか、匂（にお）いは酷くない。

「棺桶に入れて物を運ぶなら、チェックは小窓から顔を確認するだけだからな。ふたを開けられる心配はないし、やばいものを隠すにはこれ以上ない。密輸によく使う手だよ」

俺が指さす方向には黒い棺桶が一つのみ。

恐る恐る、俺の背の後ろからリゼットが顔をのぞかせた。

俺は釘で打たれている棺桶のふたを、腰から抜いた剣を隙間に無理矢理突っ込んでこじ開ける。

ミシミシと嫌な音を立てつつ、棺桶のふたが徐々に開いた。

「さて、お宝ご開帳といこう・・・・・・」

釘が外れ、がこんっと棺桶の蓋が床に落ちた。

俺は棺桶の中身に口を開いたまま固まる。

「ご、ごしゅっ・・・・・・っユーイン様！　お宝なんて無いじゃないですかっ」

泣きわめきながら、リゼットが俺の服をがくがくと引っ張った。

それもそうだろう。

棺桶の中には、遺体が一つ。

真っ白に透き通る雪の肌に、死人とは思えない血色の良い紅唇。

黒い巻き毛と長くカールしたまつげ。

年の頃は17～8歳くらいの、死の眠りにつく美しい少女だった。

いや・・・・・・これは人形か？

どうみても、人間の死体には見えない。

どんなに状態が良くても、不自然すぎる美しさなのだ。

なら、これがやはりアドマックの探していた宝なのだろうか？

「服装がやけに古めかしいな」

今でも貴族が催しで、アンティークのドレスを着ることは珍しくない。

ただこの少女が着ているものは、最近作られたものではなく、非常に古い。
虫に食われ、布はボロボロだが、装飾は悪くないように見える。
品自体は、どこぞの王族が身にまとっていたもので間違いないと思えた。

ふと俺は胸元に手をやって、アドマックから譲り受けたものを取り出す。

「金色のネジ巻き・・・・・・」

なんとなく直感めいたものがあった。
俺は棺桶の中に手を伸ばし、少女を抱き起こす。
バルコニー型の胸元が妙になまめかしい。
手にあるネジ巻きを転がしつつ、さてどうかなと、俺は少女の身体をさぐった。

「う～ん、リゼットの上げ底Cカップとは違い、まごう事なきDカップ」
「・・・・・・ユーイン様」

シャキン、シャキンと鋏が鳴る音と、幽鬼のような声が背後から響く。
冗談だってと俺は冷や汗かきつつ、少女の首の後ろに手をやり、穴の空いた感触にビンゴっと少女の髪をかき分けた。
金の装飾にかたどられた小さい穴が空いている。

「さて、どうなるかな？」

俺は金のネジ巻きを、その穴に突っ込んだ。

思った通り、カチッと音を立ててネジ巻きはぴったりと穴に収まる。
カチカチカチと一巻き、二巻き、三巻きしたところで、俺はネジ巻きを穴から抜いた。
しばらく沈黙が落ちる。
何も起きない？　期待はずれだったかと俺がそう思ったときだった。
ばたんっとドアがけたたましく開かれる。
「ユーイン殿っ！　探しましたぞ。ふ、船の魔物に道を阻まれ、お、後れを取るとはなんたる不覚っ」
「アーサー・・・・・・」
せっかくの緊迫(きんぱく)した雰囲気が台無しだった。
ぜはぜはと大げさに息を吐きつつ、床に這いつくばるアーサーに、呆れた顔で俺が振り返ろうとすると、首に何かが絡(から)まった。
「ユーイン様っ」
リゼットが警戒(けいかい)するように鋏を構えるが、既に遅い。
俺の目の前には、綺麗な赤い瞳があった。
「再び、お会いしとうございました。陛下・・・・・・」
眠りから覚めた赤い瞳の少女は甘く囁(ささや)く。
そして、驚愕で目を見開く俺の唇に、少女は自分の唇をそっと押しつけた。
後ろでリゼットの拒絶の声が上がる。

まいったね、これは・・・・・・と、俺は必死にこの後の言い訳を考えた。

しかし、どう考えても不可抗力だろ。

人形の少女が自分の意志で動き出すなど、この世のルールに反しているのだから。

素直になれない俺と君

薄紅色のドレスの裾をもって、少女が優雅にホールを歩く。
少女の名前はアイリーン。
今はもう既に無い国の姫だったらしい。

黒い長い巻き毛を金の髪飾りでとめ、蠱惑的な赤い瞳に見つめられれば、男達は陶酔したようにアイリーンに見入った。

アイリーンはにっこり微笑んでこちらを振り向く。

「ユーイン様っ・・・・・・」

俺の姿を見つけると、アイリーンは小走りに近寄ってきた。
周囲の男共の反感を一斉に買ってしまい、俺は思わず苦笑い。

「病気がちだったんだろ？　あまりはしゃぐと具合が悪くなるんじゃないか？」
「あら、大丈夫ですわ。だって、これはもう昔の私の身体じゃありませんもの」

そう言って、アイリーンはくるりと回って見せる。
熱さはないが、身体はどこも柔らかい。
今目の前にいるアイリーンは生身ではなく、人の手で作り出された人形なのだ。
正確には、アイリーンの魂が入った人形。

「お父様とお母様は、病弱な私の事を常日頃不憫に思っておりました。一度も部屋から出られず、ベットの上から外の景色を眺めるだ

けの毎日。心配する皆の気持ちが痛いほどわかって、なんとか良くなりたかった。でも・・・・・・」

数々の医者にかかっても、一向にアイリーンは良くならなかった。結局努力の甲斐も虚しく、若くして亡くなったアイリーン。

国民は嘆(なげ)き悲しみ、政務も手につないほど落ち込む国王の身を案じた王妃は、1人の錬金術師に依頼してアイリーンそっくりの人形を作らせ、その中にアイリーンの魂を封じ込めさせた。

一巻きで10日、二巻で20日。

ねじを巻いた回数だけ、人形の身体は動き続ける。

再びよみがえったアイリーン。

王は喜び、再び皆で幸せに暮らしましたとさ。

めでたし、めでたしと俺はアイリーンに説明されたわけだが・・・・・・。

「まぁ、宝と言えば宝なのかもしれないけどな」

俺は鼻の下を伸ばした貴族の男共に囲まれた、アイリーンを見つめる。

人形だと知らずに、口説こうと頑張っている男共の姿がなんとも滑稽(こっけい)だった。

アイリーンはまるで社交場の主人であるかのように振る舞い、ホールの端ではすっかりお株(うば)（かぶ）を一奪われたご婦人方が悔しげにハンカチを噛(か)んでいる。

「いやはや、なんと美しい・・・・・・」

「お前、頼んだアドマックの見張りはどうしたよ？」

指を組み、熱心にアイリーンを見つめる信者がまた1人。
俺はいつの間にか隣(となり)に現れたアーサーに、呆れたようにため息をついた。

「大丈夫です。快くリゼット殿が交代を申し出てくれましたので。しっかりパーティーに出席して、ユーイン殿とアイリーン姫の仲を引き裂き・・・・・・てはなく、ユーイン殿がやんちゃをしないように、つきまとって見張って欲しいと」
「自分が来るより、アーサーをよこした方が得策と見たか。さすがはリゼット」

アーサーの空気を読めない、読まない才能は抜群だった。
たしかにこいつを置いておけば、どれだけ盛り上がる場面も、無理矢理盛り下げられるだろう。

「しかし、ユーイン殿は隅(すみ)に置けませんなぁ」
「あん？」
「リゼット嬢といい、アイリーン姫といい、両手に花とはこのことですぞ」
「・・・・・・・・・・・・・・」

鋏(はさみ)の魔女と人形女を花と言っていいのかが疑問だったが、俺は適当に相づちを打っておく。

リゼットといえば、昨日から非常に機嫌が悪かった。

アイリーンの不意打ちのキスの件が、よっぽど腹立ちらしい。
目覚めたばかりで、アイリーンは寝ぼけて別人と間違ってキスしたんだと、言い訳したが通用せず。
リゼットはことあるごとにアイリーンを敵視し、俺とはあれ以来

口をきいてくれない。
たかがキス一つぐらいで、そこまで怒らなくてもいいものを・・・・・・。

「おっと、ダンスが始まるようですよ？　ユーイン殿」

楽士達が奏でていた音楽が軽快な音ものへと変わる。
アイリーンは一緒にダンスをと跪く男共をさけ、こちらを振り向く。

「おぉ、アイリーン姫っ、是非とも私とダンスを・・・・・・」
「ユーイン様、ご一曲いかがかしら？」

両手をひろげるアーサーをすり抜け、アイリーンは俺に向かって右手を出した。
俺は微笑んでその手を取って、恭しく口づける。
そして、きっぱりと告げた。

「悪いけど、ダンスは他の男共に誘って貰うんだな」

その一言に、アイリーンは目に見えてこわばった。
人形のくせに、良くできた表情だなと俺は内心感心する。

「ど、どうしてですか？　何か私ユーイン様のご不況でも」
「いいや、これ以上俺がリゼットの不況を買いたくないだけさ」

俺は手をヒラヒラ振ってアイリーンに背を向けた。
音楽はよどむことなく軽快なリズムを奏で続けている。

「男の下心を見透かして高雅に振る舞う女より、俺はみっともなく

ふくれっ面さらす女の方が可愛いと思うんでね。つーわけでアーサー、後はよろしく」

ぽんっと項垂(うなだ)れているアーサーの肩をたたき、俺はホールを後にする。

アイリーンはそれ以上、食い下がることはなかった。

床にゴロゴロとワインの空き瓶(びん)が転がっている。

赤い顔と、トロンとした目でリゼットはぶんっと鋏(はさみ)を投げて壁に突き刺した。

「おい、聞いてるら？　アドマック」

「聞く、聞くから殺さないでくれ」

こくこくと激しく頷くアドマックに、満足げにリゼットは頷(うなず)き、再び新しいワインの瓶を手にしてコルクをきゅぽんと抜いた。

「だいたい、避(さ)けようと思ったら、絶対避けられてたんでしゅ。なのに、ユーイン様は、でれっとしれるから、あんなダッチワイフに、ちゅーされて」

「いや、なんつーか・・・嬢ちゃん。そろそろ飲むのやめた方がよくないか？　呂律(ろれつ)も回ってないし、手元も怪しくなって」

「うるさいらっ！　アドマック・・・・・・だいたい、お前が余計なものをユーイン様にわたすらこんなことになったんら」

むっきぃと再びメイド服の下に隠し持っていた、小型の鋏をだだだっと連続で壁に投げつけるリゼットにアドマックは青ざめた。
一体何処にどうやって隠し持っていたのか、無数の鋏は壁に備え付けられた人形めがけて所狭(ところせま)しと突き立っている。

「あのな、だいたい嬢ちゃんは、あの坊主のなんだっていうんだよ？　恋人か？」
「・・・・・・・・・・・・・」

アドマックの問いに、リゼットは何も答えられなかった。

「あんた、坊主の侍女なんだろ？　何者かしらねぇが、あの坊主それなりに良いとこの坊ちゃんじゃねぇのか？　身分違いの恋ならさっさと諦(あきら)めちまえば・・・・・・」
「あ～き～ら～め～るぅぅぅぅぅっ？」

どすっと大型の鋏を床に突き立て、リゼットはアドマックをにらみつけた。
そしてじぃっと目を据わらせていたが、しばらくするとがくんと項垂れる。

「・・・・・・・あきらめ・・るなら・・・もう、とっくに・・・あきらめ」

しんっと沈黙が落ちた。
アドマックが伺うように下からのぞき込むと、リゼットはす～す～と寝息を立てている。
チャンスだとアドマックは、リゼットのスカートにぶら下がっている格子(こうし)の鍵へと手を伸ばした。

しかし、あと少しで届くというときに、その手はだんっと上から踏(ふ)み抜かれる。

「残念でした。アドマック・・・・・・まだ変な気は起こすなよ」

踏みつけられた手を必死で引っ張りながら、俺を憎々しげに見上げた。

「狙ったように現れたな、坊主」

「そりゃ、狙って現れたからな」

ドアの前で聞き耳たてて待機してたと笑う俺に、アドマックはけっと吐き捨てた。

俺は「ユーイン様の馬鹿」と書かれた人形の、哀れな末路に手を合わせておく。

俺の身代わり、ありがとう。

「・・・・・・ったく、片っ端から飲み散らかしやがって。あぁ～、一級品のラベルばっか・・・・・・がぶ飲みするような酒じゃないっての」

俺は床に散らばった瓶を並べつつ、飲みかけで酒が残っている瓶を見つけると、口をつけて一気に煽(あお)る。

うん、上等な味で確かに美味い。

船長が約束を守ってパチもんではなく、きちんと酒と食事は一級品を運ばせているようだ。

「お前よぅ、この嬢ちゃんのことをどうするつもりなんだ？　何があったかしらねぇが、この嬢ちゃんだって、元はそれなりの家の出

なんじゃねぇのか？」
「以外と目ざといな、アドマック」
「隠しても上流階級の発音の仕方は癖(くせ)で出る。お前ら口は悪いが、下層特有の訛(なま)りってものが全くねぇしな」

俺が足をどけると、アドマックは急いで手を引っ込めた。
すーすーと器用な姿勢で眠るリゼットを、仕方がない奴だなと俺は抱え上げた。

「別に俺がどうこういう筋じゃねぇが、大事ならさっさと自分の女にしちまいな。嬢ちゃんの方は色々気にしてるみたいだが、あんたから言い出せばきっと丸く収まるだろうよ」

俺は身分なんかクソくらえだと言うアドマックに、俺もそこは心の中で同意しておく。
女は可愛ければ、出自なんかどうでもいい。
それこそ鋏の魔女なんて異名がついてるほど血に汚れていても、若干頭がおかしくても、俺にとってはたいした問題ですら無かった。

「事を急げばし損じる。俺は別にリゼットをないがしろにしてるわけじゃなくて、ただ単に期が熟(じゅく)すのを待ってるだけなんだけどな」

全く誰も解っちゃいないと、俺はため息をついて部屋を出た。
リゼットがよだれをたらしつつ、寝言で俺を罵(ののし)る。
怒りが風化するまで、もうしばらくかかりそうだ・・・・・・。

自室に戻ると、俺はベットの上に酒臭いリゼットを寝かせる。
このまま無事に航海が終わって、その時が来れば・・・・・・俺は窓から見えるぼんやりとした月を眺めながら、リゼットの柔らかい栗色の髪をそっとなでた。

このまま無事に航海を終えれば・・・・・。
しかし、その想いと裏腹に事件は再び船の上で起こってしまったのだった。

忍び寄る不穏

「これは酷いな。つーか、ここまでやらかす必要なんてあるのかね」

俺は血だまりとなったとある一等船室で、布を被された遺体とご対面していた。

血の滲んだ布を上げれば、これまた無残な被害者。

どれほど恨み深いのか、はたまた快楽からか。

数十箇所に渡る刺し傷は、どうにも陰湿さを感じる。

「ど、どうですか、お客様？」

必死に吐き気を押さえて、部屋の外から顔をのぞかせるマートンに俺は肩をすくめた。

この部屋は若い貴族が使っており、昨夜何者かに惨殺され、昼頃に異臭がすると他の客の苦情で事件が発覚したのだが・・・・・。

「犯人なんて、皆目見当もつかないね。あ、他の乗客や水夫達が騒いでるように、アドマックがやらかしたってのだけはないから。ずっと俺達が交代しながら見張っていたし、抜け出すようなことはしてない。それに、こんなことをしてもアドマックにはなんのメリットもないだろ」

牢からアドマックが脱出したなら、水と食料をかっぱらって、さっさと小型ボートで逃げているだろう。

それこそ、こんな貴族にかまってる場合ではない。

俺は、床に落ちてる貴族の服を拾い上げた。

素っ裸で死んでいることから、一体何をしていたのやら。

なんだか面倒なことになりそうだなと、俺はあっさりと事件の捜

索を投げた。

「船の到着にはまだしばらくかかるんだろ？　変に犯人捜しで疑心暗鬼(あんき)になってもしょうがない。客には夜しっかり鍵をかけておねんねしなって言っておきな」

俺の言い分に、マートンも納得した。

今度再び水夫達や乗客の感情が爆発したら、次は抑制するのは難しいだろう。

この事件はアドマックは無関係だが、無理矢理アドマックのせいにして処刑されかねなかった。

「ユーイン様・・・・・・」

声がした方に振り向けばそこには野次馬達と、アイリーンの姿があった。

アイリーンは口元に手を持って行き、がたがたと震えている。

「どうしたんだよ、アイリーン」

「ユーイン様。亡くなった方なのですが、実は・・・・・・」

俺がいなくなった後のパーティーで、執拗(しつよう)にアイリーンにせまっていたらしい。

アイリーンは婚約者が乗船していることを知って、かたくなに断ったそうなのだが。

「その後、婚約者と随分険悪になって口論していたのです。そちらの婚約者の方も先ほどから姿が見えなくて・・・・・・」

「へぇ、あっそう」

俺はアイリーンの言うことを適当に聞き流した。
そのことに、アイリーンは困ったような顔をする。

「もしや、婚約者の方が犯人なのでは？」
「それなら、それでいいんじゃないのか。非常に解りやすいだろ？
次に狙われるのは恨みを買ったアイリーン、お前で決まりなんだから。他の乗客に災難が飛び火することもないし、これにて一件落着だろ」

全く問題ないと笑う俺に、アイリーンは目に見えて引きつった。
欲しい言葉を与えず、あえて的を外して真逆のことを言う俺に、アイリーンは相当苛立っているのだろう。

「わ、私が狙われる可能性があるのですね。ユーイン様は・・・・・・私を守ってくれませんの？」
「俺が守らなくても、他に立候補者はたくさんいるんじゃないのか？　なぁ、貴族の若者諸君。こんな麗しい姫が助けを求めているのに、手を差しのばさないなんて男が廃るってもんだ」

俺がおどけて周囲を見渡せば、慌てて我も我もと騎士役を買って出る貴族達が現れた。
どれでも、選びたい放題だろ？　と俺が手をヒラヒラ振ると、アイリーンは納得いかないと言いたげな瞳で俺を見据(みす)える。

「でも、ユーイン様。こうも考えられなくて？」

扇で口元を隠し、アイリーンは冷たく呟いた。
何を言い出す気だ？　と俺は無表情で続く言葉を待つ。

「犯人は実はアドマックで、貴族を殺したのは報復のため。牢から

勝手に出ていたらならば、それは見張り役をしていたものの怠慢。
いえ、ひょっとしたら見張り役をしていたものが、いつの間にかアドマックと取引をして共謀・・・・・・牢から出していたなんて事もあり得ますものね」

しんっと沈黙が周囲に落ちた。
風向きが変わったのを感じる。
アドマックが、貴族ばかりを狙う残酷な海賊であるのは周知の事実。
俺の誘導に乗ったはずの貴族達が、俺に対して疑惑の目を向けていた。

冷静に考えれば、アドマックが犯人でないことなどすぐに解るはずなのだが、空気に飲まれた貴族達はそこまで頭が回らない。
婚約者犯人説を使って、都合良く俺を侍らせられなくなったから、急遽方向転換という訳か・・・・・・。

なかなかやるねと、俺は素直に感心しておく。
ならば仕方ない。
状況は変わったのだから、俺も方向転換と行こうじゃないか。
やられっぱなしというのは、俺の美学にあわないってものだ。

「解った。じゃぁ、こうしよう・・・・・・。俺のことが疑わしいというのならば、見張りは俺やリゼットではなく、乗客の中の誰かにやって貰う。水夫達は先の襲撃でアドマックに対して私怨もあるし、船の維持のために必死で働いているからな。見張り役にさく労力なんてとてもないだろ」

俺の発言に、顔を見合わせる貴族達。
水夫達はそんな光景を白い目で、遠巻きに見ている。

実際、水夫達は亡くなった者達の仕事を埋めるため、休む間もなく過酷な仕事に従事していた。
俺の発言は水夫達の状況を重んじての発言。
これで味方は二つに分かれ、拮抗状態になる。

さて、自分が不利益をかぶってまで、見張り役を買って出るような、物好きな貴族がいるかどうかが、肝心なわけだが・・・・・・。

「では、その見張り役。不肖このアーサー・オブライエンが引き受けましょう」
「・・・・・・アーサー」

あっさりと物好きは現れやがった。
びしっと挙手するアーサーに、俺は沈痛な面持ちで肩を落とす。
もう少し、この緊迫した状況を楽しみたかったというのに。
本当に興というものを理解しない男である。

「あぁ、じゃぁ・・・・・・アーサーに頼むわ。後はよろしく」
「まかしてくれたまえ！　必ず陸地に着くまでこの大任、みごと全うしてみせよう」

はっはっはっと笑うアーサーに、馬鹿がいて助かったと安堵する貴族達。
そんな中、アイリーンと俺はうすら寒い笑顔をたたえたまま見つめ合う。

「ところで、アイリーン」
「なんですか？　ユーイン様」
「さっきは、別の奴に守ってもらえって言ったが、やっぱり俺がお前の騎士役をさせてもらうわ」

いなくなっている被害者の婚約者が、犯人という線がきえたわけではない。
だから護衛は必要だという俺に、アイリーンは目を見開いた。
俺の真意を測りかね視線が一瞬泳いだが、一度目を伏せるとすぐさまに気弱な女の表情へと豹変させる。

「え、えぇ・・・・・そうですわね。ユーイン様が守ってくださるというなら、私も非常に心強いですわ」

不意打ちで、アイリーンの騎士役をかっ攫(さら)われた貴族達はぽかんとしてたが、アイリーンがすかさず了承を返してしまった以上、これ以上介入しようもない。
貴族達の嫉妬(しっと)と反感を買いつつ、俺は跪(ひざまず)いてすっと手を差し出せば、アイリーンはその手の上に自分の手を重ねる。

「守ってくださいませ、ユーイン様」
「必ずお守りいたしましょう」

その光景を、呆然と見つめる影一つ。
リゼットはうつむき、スカートの裾をぎゅっと掴んだ後くるりと背を向け、その場を走り去った。

その後、船内をくまなく捜索(そうさく)したが、いなくなった被害者の婚約者は見つからなかった。

これは婚約者を殺害後に海に身を投げたのでは無かろうか？
そういう結論が濃厚となりつつあった。

この船が出航して以来、海賊の襲撃、殺人事件と立て続けに良くない事が起こっている。
乗客のご婦人の中には、疲れからか具合が悪くなる者もでてきたようだ。
社交場に見える姿も徐々に少なくなってきている。

そうなると、部屋にこもった自分のパートナーをほったらかし、放し飼いになった男共の動きが活発になってくるのだから、なんとも俗な話だと俺は呆れた。

「アイリーン姫、是非私と一曲・・・・・・」
「ごめんなさい。お相手できかねますわ」

送られる男共の秋波をかわし、アイリーンは俺の腕に自分の腕を絡ませる。
憎々しげな男共の視線を受けて、俺はひがむなよと心の中で突っ込んでおいた。

身分の知れない俺を捕まえるより、そこらの独身貴族を捕まえた方が、よっぽどこれからの実になるというだろうに、何故かアイリーンの俺への執着はますます加熱していた。

「少し、人に酔いました。外に出ませんか？　ユーイン様」

軽やかに微笑んで手を出すアイリーンの手を取って、俺はエスコートする。
散々子どものときにたたき込まれた事は癖になっている。

俺のそつのないエスコートに満足げにアイリーンは身をゆだねていた。

甲板に出れば、海と空は紅に染まっていた。

これを綺麗と取るか、不気味と取るかは賛否両論だなと俺は思う。

縁に手をかけ、アイリーンはうっとりと呟く。

「綺麗な夕日・・・・・・昔を思い出しますわ」

「昔ね・・・・・・俺も思い出したよ」

目を細めて懐かしむアイリーンとは裏腹に、俺の胸中はよろしくなかった。

そういえば、逃亡の果てに臣下に自害を申し出られたときも、こんな血のような真っ赤な夕暮れ時だった。

刃を首に当てて震え、一向に動けない俺。

あのときほど、死を身近に感じたことはいまだかつて無い。

じれた臣下に手をかけられそうになり、来るべく痛みと恐怖に目を閉じたが、結局それは訪れなかった。

恐る恐る目を開ければ、目の前にはリゼットの姿。

鋏を手にし、返り血で頬をぬらして、夕日に照らされていた。

私がご主人様をお守りしますと言って、きゃははっと狂ったように笑うリゼット。

あのときの俺は、リゼットに何も言えなかった・・・・・・。

「ユーイン様？　どうなされました？　ご気分でも」

「いや、なんでもないよ。ただ、ちょっと考え事してただけだ」

急に現実に引きもどされ、俺はぎこちなく笑う。
次の瞬間、唇に冷たく柔らかいものが押し当てられた。
覚えがある感覚、目を開けば間近にアイリーンの顔がある。
軽いキスの後、アイリーンは上目遣いに問う。

「女からこういう事をするのは、はしたないとお思い？」
「いや、積極的な女の子は嫌いじゃないよ」

俺はアイリーンの黒髪を指でからめて微笑む。
アイリーンは俺の手を取って、自分の頬に当てた。

「私、ずっと憧れていましたのよ。自由に動けるようになったら、絶対すてきな殿方と恋に落ちるって」
「それで・・・・・そのすてきな殿方とやらは、みつかったのか？」
「えぇ、もちろん」

アイリーンは頬に添えられている俺の手のひらをなぞって、そっと俺の唇へと指を動かす。
今度は貴方からしてくれない？　そう言っているのだろう。
じらすか素直に乗るか、男と女の駆け引きだった。
アイリーンの望み通り、俺はすんなりキスをしてやる。
先ほどの軽いキスとは違って、舌をからめる貪るような激しいキス。
長いキスの後、俺とアイリーンは見つめ合った。

「一生に一度ぐらい、燃えるような運命の恋に身を任せたいと思いません事？」
「運命か。俺はそんなものに身を任せず、自分の女は自分で選び取

る」

俺が肩を竦めれば、野心家な方とアイリーンは笑う。

風になびいて乱れた髪を直し、アイリーンは俺の腰へと手を回す。

「私を貴方のものにして・・・・・・ユーイン」

親しげに俺の名前を呼び捨て、そう言って胸にすがるアイリーンに、夜になったらなと俺は囁いた。

その返答に顔を上げたアイリーンの表情が、喜色に染まる。

アイリーンは再びついばむように俺にキスをし、じゃぁ、部屋に戻って待っていますと、スカートの裾をもって優雅に一礼。

女の夜の支度は時間がかかるもんだ。

俺が了承の手を挙げると、アイリーンはくるりと背を向けて小走りに去っていった。

俺は縁に背を預け、頭上を仰ぎ見る。

疲労がたまっているなと俺は感じた。

さすがに、こうもずっと海の景色ばかりだと飽きる。

船上での暮らしが長く続くと、退屈でしょうがなかった。

暇つぶしに誘ってくる女の相手をしても、満たされはしない。

いや、満たされない原因は他にあるのかと、俺はちらりと視線を横に向ける。

あのときとは違って、血に染まってないリゼットが夕日に照らされ立っていた。

「よう、リゼット・・・・・・見ていたのに、今日は怒らないんだ

な？」
「侍女風情が、ご主人様のなさることに対し、進言できるとは思えません」
笑顔を貼り付けて答えるリゼットに、俺は口の端をつり上げた。
何も言わないのは俺への呆れか、それとも相当怒っているのか。
俺のことを名前で呼ばず、動揺ではなくリゼットはあえて「ご主人様」と呼んだ。
これで、また一歩後退。
そのことが、俺を無性に苛立たせる。
「男は女にすがられると弱いもんなんだよ」
「下心が透けて見えていてもですか？」
言葉に含めてしまった棘に、リゼットはしまったとばかりに一瞬表情をゆがめたが、すぐさま何を考えてるか解らない笑顔に戻る。
俺は真面目な顔で首を傾けた。
「下心が透けて見える方が、安心することもある」
きっかけさえあれば、男女の仲などいくらでも進展するのだ。
俺が下心を透かして見せて欲しい女は、どうにも頑なでまどろっこしい。
男女の駆け引きにしては、じれすぎだと俺は思う。
「なぁ、リゼット。お前は一体どうしたいんだ？」
「何がですか？　なんのことだか、リゼットさっぱり解らない」
きょとんとした表情をつくり、大げさに肩をすくめるリゼット。
その態度に俺は目を据わらせて、ふぅん？　と呟いた。

そうか、そう来るのか・・・・・・。
たった一言、俺が欲しい言葉をリゼットは言ってくれない。
「もういい・・・・・・好きにしろよ。俺も勝手にするから」
言い過ぎたとは思った。
でも、言い過ぎぐらいにしておかないと、リゼットはいつまで経(た)っても解ってくれない。
おずおず相手の顔色を伺(うかが)って嘘をつき、引っ込んでいては欲しいものは手に入らないのだ。
「・・・・・・・・・・・・・・」
リゼットは俺に何も答えなかった。
俺は、またリゼットに何も言えなかった。
期はまだ熟(じゅく)せず、その時は遙(はる)か遠い。
本当に、どうしてこうもお互い素直になれないんだろうな？
俺は失笑するしかない。
自分から動かずリゼットが動くのを待つというのも、いささかな卑怯(ひきょう)な気がしないでもなかったが。
どちらが先に告白したか？　こういうことは後々まで響くのだから妥協(だきょう)はしたくない。
アイリーンの部屋に行ってくると船内へと戻る俺に、リゼットは立ち尽くしたまま、やはり何も言ってはくれはしなかったのだった。

すれ違う言葉（前書き）

※　若干青少年にふさわしくない表現が含まれています。

すれ違う言葉

船は立て続けに起きた事件が嘘のように、順調な航海を続けていた。
このままなら4日後の早朝、船は目的地である陽菜国へと到着するだろう。
気だるい身体を起き上がらせ、俺はうっすら明らむ空を窓から見上げる。

「ユーイン・・・・・・」

白い腕が俺の首に絡みつき、素肌のアイリーンがしなだれかかった。
まるで死体かと思うような冷たい肌が、火照った身体には気持ちいい。
アイリーンとの情事の後の気だるい空気の中、俺は黒髪をなでながら微笑む。

「人形の身体とは思えないなアイリーン」
「生身か人形なのかなんて、たいした問題ではありませんわ。それに、生身はいつか老いて枯れ果てるもの。この身体なら一生美しい姿のままで、時をとどめられる」

くすりっと笑って、アイリーンは俺に乗っかった。
紅い瞳がじっと俺を見上げた。
たいした問題ではないと言いつつも、アイリーンは咎めるような表情を浮かべている。
人形なんて意地悪な呼び方はしないで困った方と、アイリーンはついばむように俺に口づけた。

俺はアイリーンの細い腰を抱いて、姿勢を反転させる。
「まだ、夜が明けたばかりですもの。貴方の侍女が来るまで時間はありますわね」
どうします？　と蠱惑的に微笑むアイリーンの案に、俺は乗ることにした。
確かに朝まではまだ時間があるし、俺も枯れた年寄りではないつもりだ。
視線を絡ませ、どちらからともなく噛みつくようにキスをする。
「愛していますわ、ユーイン」
「俺も愛しているよ、アイリーン」
睦言はとどまることもなく・・・・・。
目を閉じて、喉をのけぞらせたアイリーンの嬌声が再び響いた。

ぎぃぎぃっと船体が軋む音が響く。
今日はどうにも風が強いようだった。
「朝食の時間です。アーサー様」
むすっとした表情で食事をもって現れたリゼットに、アーサーは恭しく一礼する。

アドマックが閉じ込められている懲罰室の前で、律儀にアーサーはずっと突っ立ったまま見張りをしていたらしい。
軟弱な貴族のお坊ちゃんかと思えば、意外と引き受けた仕事には真面目なようだった。

「おはようございます、リゼット嬢。今日はまた・・・一段とご機嫌麗しくないご様子で」

相変わらず空気を読めないアーサーの言葉に、リゼットはぴくりと眉をつり上げた。
いちいち指摘されなくとも、ご機嫌麗しいはずもない。
今頃何が行われているのかと考えれば、はらわた煮えくりかえる思いだった。
怒りまかせにだんっと乱暴に床の上に食事を置き、リゼットは壁に背を向けて座り込む。
そして、やすりでご自慢の鋏を無言で研ぎ始めた。
ストレス発散にはこれに限るといいたげな態度に、さすがのアーサーも気まずげに視線を泳がせる。

仕方ないとアーサーはリゼットの動向を気にしつつ、食事にいそいそと手を伸ばした。
今は鋏を研ぐことに集中しているが、いつ爆発して鋏が飛んできても不思議ではない。
あんな巨大な鋏が直撃したら、洒落にならないどころでは済まないのだ。

アーサーは何か言いたげに、ちらちらとリゼットの様子を伺う。

「リへっとひょう・・・ふぐに、ふがるあ・・・ままならむ」
「貴族ならば、きちんと口の中のものを飲み込んでからおしゃべり

なさいませ」

黙ってそっとしておけばいいのに、お節介なアーサーはまた口を開いた。

今度は何だ？　と睨むリゼットに、アーサーはごくりと喉をならして、急いで食べ物を飲み込む。

慌てたせいで別の所に食べ物が入ったのか、アーサーはげほげほとむせた。

仕方ないとリゼットは嫌々コーヒーをカップに注いでやれば、アーサーは慌ててそれを手に取る。

案の定というか、急いで飲み干そうとしたアーサーは、熱いコーヒーで口の中を火傷でもしたのだろう・・・・・・。

今度はうげっと舌を出していた。

なんとも忙しない姿に、リゼットは呆れる。

そんなリゼットの視線に気づき、アーサーは姿勢を正してごほんと咳払いをした。

「ええとですね、私が何を言いたいかというとですね？　リゼット嬢。心配せずとも、ユーイン殿は大丈夫だと言いたかったのです」

「何が大丈夫なんですか？　リゼットさっぱりわかんない」

棒読みで答え、とりつくしまもないリゼットにアーサーは汗をかく。

リゼットはふんっと鼻をならし、再びシャッシャと鋏を研ぎ始めた。

重苦しい空気を吹き飛ばそうと、アーサーは快活にはっはっはっと笑う。

「いやぁ、若気の至りというか、なんというか。英雄色を好むと言いますしね？　船旅というものは、開放的な気分になるものですか

ら。主人のやんちゃに時には目をつぶるというのも、臣下の務(つと)めというものでっ・・・・・・」

アーサーの鼻先をかすめ、どすっと鋏が壁につきたった。

地雷を踏んだかと、アーサーは真っ青になって口をぱくぱくさせる。

深々と壁に突き立った鋏をリゼットは軽々と引き抜き、ギロリとアーサーを睨(にら)んだ。

「それ以上言ったら、ちょん切りますよ」

「は、はい・・・・・・すいませんでした」

地獄の底の悪鬼(あっき)のごとく、絞(しぼ)り出すようにリゼットは暗い声で警告した。

ぷるぷる震えて、しゅんっと落ち込むアーサーにリゼットは重くため息をつく。

「貴方になんかユーイン様の事を語って欲しくないです。ユーイン様の事を何も知りもしないくせに」

「確かに、仰(おっしゃ)ることはごもっとも。しかし、リゼット嬢の方こそ、近すぎるからこそ、見えなくなっていることもあるのではないですかな？」

「はぁ？」

何を言っているんだと、リゼットは顔をしかめた。

アーサーはむぐむぐと付け合わせのウインナーを咀嚼(そしゃく)し終わると、スコーンにクロテッドクリームをつけながら独(ひとり)り言のように喋(しゃべ)る。

「お互い大事にしすぎると、かえってすれ違うことはよくあることです」

「・・・・・・アーサー様？」

なにやら真面目なことを言い出すアーサーに、リゼットはきょとんとした。

ひょっとしたら出した食事の中に、古くて悪いものでもまざっていたのだろうかと、若干不安になる。

アーサーはそんなリゼットの懸念（けねん）をよそに、ぺろりとスコーンを平らげると、残っていたコーヒーを一気に飲み干（ほ）した。

「それに・・・・・・」

「それに？」

何を言い出すんだ？　と次の言葉を待つリゼット。

そんなリゼットに、アーサーは笑顔であっけらかんと、とんでもないことを言い放った。

「もし、こんな簡単な計略に、あっさり引っかかるような主人ならば不要。仕えるべきものは選ばなければならない。そうでしょう？　リゼット嬢」

言ってはならない一言だった。

アーサーは首に感じたひやりとした感触に、視線を下へと移動させる。

音も立てず、リゼットの鋏がアーサーの喉元（のどもと）に当てられていた。

先ほどの発言は自分の主人を軽んじるもの。

それを見過ごすことはできないと、リゼットは目を細める。

アーサーはそんなリゼットに、お見事と両手をあげて降参（こうさん）した。

言い過ぎましたと謝ったが、固定されたリゼットの鋏は降りるこ

とがない。
アーサーは腰に差したレイピアに手を伸ばし、つばをかちかち鳴らす。
まさか自分と一戦交えるかとリゼットが構えれば、アーサーは違いますと首を横に振った。
「私はね、リゼット嬢・・・・・・貴方がうらやましいのです」
「私がうらやましい？」
一体何が言いたいのか？　リゼットは怪訝（けげん）な顔でアーサーを見つめる。
なにやら遠回しで要領を得ず、もったいぶるようなアーサーの言い方に、リゼットは苛々（いらいら）し始めていた。
「貴方の主人に対する畏敬（いけい）の念には揺（ゆ）るぎがない。偽（いつわ）りがない」
「それが一体何だというの？」
言いたいことは簡略（かんりゃく）に話せと言うリゼットに、アーサーは真剣な表情で訴えた。
「そういう風に思うに足る主人を持てるのは、とても幸せなことだと私は言いたいのです」
リゼットはがくっと肩を落とす。
これだけ引っ張っておいて、言いたいことはそれだけなのかと。
脱力したようにリゼットは言葉をはき出す。
「だったら、貴方もそういう主人に仕えればいいだけの話でしょう」
自分の意に沿（そ）わない人について行くなど、リゼットはまっぴらご

めんだった。
家を捨てたリゼットにすれば、今さらなんのしがらみもないのだから。
アーサー自身がどうなのかは解らないが、アーサーのことなど、リゼットにとってはどうでも良いことでしかない。
なので、好きになされば？　とリゼットは冷たく助言した。
すると・・・・・・・アーサーは何故か有頂天(うちょうてん)になってはしゃぎ始める。
「そう・・・・・・私も自分の得心いく主人に仕えればいいだけの話なのです、リゼット嬢！」
目を爛々(らんらん)と輝かせ力説するアーサーに、リゼットはそうですねと適当に同意しておく。
一体何をそんなに、鼻息荒く興奮(こうふん)しているのだろうか。
本当に感情の起伏(きふく)が激しい貴族のお坊ちゃんだなとリゼットは思う。
疲れるからこれ以上相手にしたくないと、リゼットは話を無理矢理打ち切ることにした。
「早く仕えるに足るだけの器量を持つ主人が見つかるといいですね」
「はい、実はそれはもう目星をつけているのですっ」
ばっちりですと親指を突き立てるアーサー。
それはそれは、目星をつけられた方はお気の毒と、心の中でリゼットは突っ込んでおく。
リゼットが馬鹿馬鹿しくなって鋏を降ろせば、それと同時にアーサーの腕が上がった。

「ところで、リゼット嬢。そろそろ、ユーイン殿のところに朝の支度に行かなくても良いのですかな？」
「っ・・・・・・」

指さすアーサーにつられて、リゼットは時計を見た。
まずいと、思わず手を口元に持っていく。
アーサーの訳のわからない話に付き合っていたら、随分と時間が経っていたようだ。
朝の支度に遅れるなど、侍女としてはあるまじき失態とリゼットは慌てて鋏を片付ける。
慌ただしくドアを開けて走り去るリゼット。

その後ろ姿が見えなくなってしばらく・・・・・・。
「ついに、我が本願叶(かな)いたり・・・・・・」

ふふふっとアーサーは、不気味な含み笑いを漏らしたのだった。

交差する策謀

急いで朝の支度の準備をし、乱(みだ)れた息を整えてリゼットはドアの戸を叩いた。
部屋の中から返事はない。
遅れてきた事に対して怒っているのだろうかと不安に思いつつ、恐る恐るリゼットはドアを開けた。
部屋の中には、ベットで裸体で寝転がっているアイリーンしかいない。

「随分遅いお出ましなのね・・・・・・」
「ユーイン様は、どちらにおられるのですか？」
「ベットに飽(あ)き気味だから、散歩してくると言われて出て行かれたわ」

そうですかと無表情で答えて、リゼットは床に脱ぎ散らかしている服を片づける。
突然、ばしゃんっと冷たいものがリゼットに浴(あ)びせかけられた。
ぽたぽたとリゼットから赤い滴(しずく)がしたたる。

「まるで、頭でも割られて血がしたたり落ちてるみたいね」
「そうなって欲しいと、仰っておいでですか？」
「そうねぇ、だって貴方邪魔なんですもの」

にっこりと微笑(ほほえ)むアイリーン。
表情を変えずポケットから出したハンカチで、リゼットはワインを拭(ぬぐ)う。
病弱で薄幸(はっこう)な姫・・・・・・。
事情を聞いた当初は同情しないでもなかったが、隠していても解

る女独特の毒に当てられ、リゼットは　アイリーンの事がどうしても好きにはなれなかった。

「はたして侍女風情が、自分の主人の女の暴挙に対し、手を挙げられるのかしら？」

「まさか・・・・・私はこんなくだらない事で怒ったりしません。手を挙げるのは相手を選びます」

お前など、手を挙げる価値もないと小馬鹿にするリゼットに対し、アイリーンは眉をつり上げる。

ふんっと鼻で笑い、肉惑的な裸体を抱えて見せつけるようにリゼットに胸を寄せた。

「その貴方が手を挙げる価値がない女は、ユーインは存分に手をつけたのだけど？」

「・・・・・・ユーイン様を呼び捨てですか」

リゼットは淡々と呟いた。

平常を装っても業腹なのかしら？　とアイリーンは笑う。

その姿に、リゼットはいますぐこの黒い女を始末したい衝動に駆られた。

しかし、もしアイリーンが言うように本当に寵を受けているなら、リゼットがどうこういうのは筋違いというものだった。

自分の主たる存在が選んだ女を、侍女が害することなどできるはずもない。

アイリーンは黙り込んだリゼットに満足し、ほっそりした足を組む。

「貴方、陸に着いたら私とユーインの前から消えてくれないかしら？」

「・・・・・・・・・・・・」
「器量も悪いし、侍女のくせに主人の行動に対して自己主張が強すぎる。そんな使い勝手の悪い侍女なんて、必要ないでしょう？」
「っ・・・・・・」

だから消えてちょうだいと笑うアイリーンに、リゼットは愕然とした。
まるで、頭を鈍器で殴られたような衝撃に見舞われる。
ほんの少し前まではアイリーンの言うように、自分はこんな差し出がましい感情を持ったことなどなかったのにと。
自分は侍女なのだから一歩引いていなければならないのに、まるで恋人のごとく焼き餅を焼いて、何をしているんだろうとリゼットは狼狽えた。
酔った頭で聞いた、アドマックの言葉がフラッシュバックする。
恋人か？　と聞かれたあの時、自分は何も答えられなかったではないかと、リゼットはうつむいた。

「ねぇ、消えてちょうだい。貴方もういらないのよ」

あははっと笑うアイリーンにたまりかねて、リゼットは胸元を押さえ部屋を飛び出す。
部屋を出たところで、どんっと人にぶつかり、思わずリゼットは顔を上げる。

「リゼット？」
「な、なんでもありません・・・・・・ご、ご主人様っ」

蒼白な顔でリゼットは声を絞り出す。
こんな負け犬みたいな・・・・・みっともない姿を見られたくないと、リゼットは慌てて顔を伏せる。

非礼も承知でリゼットは、その場を急いで逃げ出すしかなかった。

俺はあっという間に姿を消したリゼットを見送り、やれやれと部屋の中に入る。

部屋の中には、アイリーンが勝ち誇ったような表情でいた。

何があったかは聞かずとも察しがつく。

「お帰りなさい、ユーイン」

「ただいまと、のんきに言える状況ではないみたいだけどな。リゼットに意地悪すんのはやめて欲しいもんだが」

「あら、身の程を教えてやっただけですわ」

アイリーンはバスローブを着て、俺へ抱きつこうと腕を伸ばす。

受け入れられて当然と言いたげな姿に、俺は辟易した。

するりとアイリーンの手を避け、俺は距離をとる。

アイリーンの眉が、ぴくりとつり上がった。

「じらさないでくださいな。恋人の抱擁を避けるなんて意地悪な人」

「恋人？　誰のことだ、それ？」

心外そうな表情であっけらかんと答える俺に、アイリーンの表情は固まった。

あまりにもおめでたい頭に、俺は口の端をつり上げる。

「何を言っているの？　だって、貴方私の事を愛してるって言って・・・・・」

「愛ねぇ・・・・・・」

俺は思わず苦笑いをした。

愛しているなどという言葉には、意味など無い。

だいたい、言葉の中身の証明など誰ができる？

意味があるのは、相手のためにどれだけ尽くせるかという行動だけだ。

「なぁ、アイリーン。お前にとっての愛ってなんだ？」

俺は表情を消して真摯にアイリーンに問う。

「・・・・・・幸せになれるのが愛でしょう」

「それは誰の幸せだ？」

相手のための幸せか？　自分のための幸せか？

それとも、全く関係ない第三者のための幸せか？

アイリーンは言葉に詰まった。

「自分が不幸になってでも、相手が幸せならそれでいいってお前は思えるのか？」

人間誰しも自分換算だ。

自分を基準に考え、自分の不利益を被っても誰かに尽くすなど、そうそうできることではない。

「自分が不幸でも相手が幸せならなんて、俺はとてもそんな事は思えない。でもな？」

俺の脳裏に、あの日のリゼットの血に汚れた姿が浮かぶ。

国を追われ、自害せよと臣下にせまられた俺を救い、ずっとここまで支えてきてくれたのはリゼットだ。
俺のために狂った侍女を演じ、手を血に汚し、どこまでも一緒に走ってきてくれた。
あいつがいたからこそ、今ここに俺はいる。

「俺の目の前で、絵に描いたような綺麗な愛の形を作ろうとしてる奴がいる。勝手にやっていることだから、俺が何かしなければいけない義務はないが・・・・・・」

何かしなければと思わせてくれる。
そこが重要なのだと俺は心の中で呟いた。
裏切れない、決して裏切ってはいけないものというものが、この世にはあるのだ。
守りたいと思えるものがあるのは、幸せなことなのだ。
リゼットがそう思わせてくれることで、俺の中の空虚さが消えていく。
自然に浮かんだ俺の笑みに、アイリーンは怒りを称えた目で俺を見据えた。

「随分・・・・・・恥ずかしげもなく、くさい台詞を吐けますのね」
「心にもないこと言うから、滑稽なんだろ？　本心からなら格好いいさ。それに、俺が使えばどんなチープな台詞も格調高くなるもんだ」

自分で言っておいて、なんとも偉そうなことだなと思う。
他人の前ならこんなに簡単に惚気られのに、リゼットを前にすると言えない。
リゼットの方から先に言い出すのを俺は待っている。
ずるい男だと、リゼットが知ったら呆れることだろう。

苦笑いを浮かべた後、俺はさてとアイリーンを睨(にら)んだ。
俺とアイリーンの間に、見えない火花が散(ち)る。
本当ならば陸に着くまでお芝居を続けて、さようならというのが俺の予定だった。
それが、一番リゼットの安全が保証されることだと思ったから。
だから意に沿わぬ隷属(れいぞく)にも耐えられた。
でも、それもさすがに限界。
俺の苦労が水の泡になって大損害だ。

「私を選ばず、あの侍女を選ぶと言うことですのね」
「ま、そうなるわな。他に選択肢無し」
「・・・・・・後悔しますわよ」
「後悔させてみろよ。人形女」

ケンカは売られても利にならなければ買わない主義だが、俺の労働が無駄になった分は精算して貰(もら)わなければ困る。

しかし、そう思ったものの・・・・・・。

もとはと言えば俺が興味本位でネジを巻かなきゃ、こんなことにはならなかったわけだが。
いや決して、アイリーンの乳につられたわけではないと主張したい。
・・・・・・そこのあたりの突っ込みは、無かったことにしよう。

俺は勝手に結論づけたのだった。

幸せはどこにある？

空が抜けるように青かった。
所々白い雲が風にながれている。
陸地が近くなっているのか、海鳥たちが船の周りを旋回していた。

「ユーイン様・・・・・・」

空を見上げているリゼットの目に、涙がたまっていく。
船の見張り台の上に登り、一人リゼットは涙をこらえつつ上を向いていた。
陸に着いたら、自分はどうなるのだろう？
そのことを考えると、リゼットは思いっきり叫びたい気分になった。

「ユーイン様に捨てられたら、どうやって生きていけばいいのか解らない」

恋だの愛だの、そんな生ぬるい感情の域はもうとっくに越えているのだ。
生きている意味のそのものが無くなってしまうと、リゼットは途方に暮れた。
好きにすればいいとアーサーに言ったくせに、好きなようにできない自分は一体何なのだろうと。

「もし、あの反乱がなかったら、ユーイン様はどこかの国の姫と結婚してたはず・・・・・・」

そう考えると、はじめから自分なんかとは違う、遠い存在なのだ

とリゼットは再認識する。
手に届くはず無い存在が、色々あって側にいたから、いつの間にか自分の手に入ると錯覚してしまっただけの話だ。
思い違いも甚だしいと言われても仕方ない。

リゼットは泣きながら笑った。
再び取り戻した王位を捨てたのだって、窮屈な生活に嫌気がさしただけなのだろう。
自分のためになんて、妄想にしたって質が悪すぎるとリゼットは思う。

「ユーイン様にいらないと言われる前に、自分から消えよう・・・・・・」

その方が、傷が浅くてすむ。
そうリゼットが決めかけていたときだった。

「よいしょっと。やれやれ、最近はここに全く登らなくなったもんだから、一苦労だね」
「船長・・・・・・」

小太りした身体をゆらしつつ、マートンが見張り台へと登ってきた。
マートンはふぅふぅと息を整えると、リゼットの隣に腰を下ろす。
「まだまだ駆け出しの頃、ここから見る海が好きだったから、久しぶりにと思ってね」
「・・・・・・そうですか」
リゼットはごしごしと袖口で涙を拭い、素っ気なく答えた。

せっかく気持ちの整理をしていたのに、思わぬ乱入者のせいで台無しである。

ヒューイ、ヒューイと海鳥の声が響く。

マートンは特に何も言うわけでもなく、聞くわけでもなく海を眺めていた。

たまりかねたリゼットが口を開く。

「船長は、どうしてアドマックの肩を持つんですか？」

「アドマックのことを、兄弟だと思っているからだね」

家族の情は意外に深いというマートンに、リゼットは冷たい視線を向けた。

アドマックの方は、マートンのことを兄弟などと思っていない。

「アドマックは船長に優しくしてはくれなかったのでしょう？　邪険にされて、粗末な扱いをしたと言っていました。恨んで見捨てるのが当然だと思います」

「ははぁ、やはりアドマックはそう思っていたか」

マートンはリゼットの話に吹き出した。

リゼットは訳がわからず、困惑する。

「私はアドマックに邪険にされたとは思っていないし、粗末に扱われたなどと、一度も思ったことはなかったよ」

「え？」

マートンは目を細め、にっこりとリゼットに笑った。

その幸せそうな顔に、リゼットはどうして？　と不思議でならなかった。

「私はね、娼婦の息子として生まれ・・・なんというか、うん・・・・・・地獄のどん底の生活だったわけだよ。私を生んだ女は終ぞ母としての認識など、一度も持ったこと無かったろうし」

それに比べてアドマックの母は、優しかったなぁとマートンは遠い目をした。

これが母親というのかと、あの時始めて知ったと言わんばかりに。

「いきなり娼婦の血のつながりもしない奴がやってきて、自分の食いぶちを取ったんだ。アドマックは怒って当然だったろうに、私に暴力をふるったり、いじめたりはしなかったんだよ。強いて言えばろくに口をきかないぐらいでね」

娼館での折檻(せっかん)が常であったマートンにとって、アドマックの態度にたいしての不満などあるはずもなかった。

何事も最低以上に悪くはならない。

アドマックとの生活は、マートンにとっては誰が何と言おうと幸せだったのだ。

「随分、アドマックと考え方が違うんですね」

「そりゃそうだよ。ずっと幼い頃を共有していても、私とアドマックは全く違う別個の人間だからね。私が幸せに感じたという事実が重要なのであって、アドマックの思いが別の所にあっても、それはまた別の話だ」

アドマックが自分を嫌っていても、自分はアドマックが嫌いではないと、けろりと言うマートンに、リゼットはなんだか毒気を抜かれた気分になった。

「・・・・・・あっさり本音が言えるんですね。私もそうなれたら良いのに」
「年のせいかなぁ。今まで意地張って素直になれずに、失ったものが大きすぎてね・・・・・・どんなに無様で格好悪かろうと、あの時、あぁしていればなぁって、思うところが多い人生だったから」

アドマックが海賊に道を踏み外した理由も、マナー知らずの貴族を船に乗せるのに、嫌気がさしたからだとマートンは自嘲的に呟いた。
もちろん、母親の死因に思うところもあったのだろう。
貴族を殴り飛ばした当時、水夫だったアドマックを、自分がきちんと声を出して諌めていれば、もっと違う形の未来があったのかもしれないとマートンは失笑した。

「怖くても、迷っても、辛くても、後々後悔するぐらいなら、一発かましてやっても良かったなと私は思うんだよ。ちょろっとぐらい、羽目をはずしてめちゃめちゃやったところで、たぶん・・・・・・なんというか、悪くなる分には状況はさほど変わらないものだし」
「それは、案に私にめちゃめちゃやってこいと、船長は言いたいんですか？」

胡乱な目を向けるリゼットに、船長はそうは言ってないと慌てて手を振る。

「いや、そういうことではなくて。君の主の幸せはどこにあるのか？　という話だよ」
「ユーイン様の幸せ・・・・・・・」

ぼそりと呟いて、リゼットは我に返ったように顔を上げて立ち上がった。

その表情には、先ほどの暗い影はどこにもない。

リゼットの髪がざぁっと海風になぶられて舞った。

涙に濡れていた頬が一気に乾(かわ)く。

「そうですよっ！　あんな性格悪い胸がでかいだけの女と一緒になっても、ユーイン様が幸せになれるはずがないんですっ。だったら疎まれようと、やっかまれようと、あの女を駆除(くじょ)するのがリゼットの勤(つと)めでしょうっ」

「胸の大きさは関係ないような・・・・・・」

思わず突っ込むマートンだが、リゼットはそれをさらりと無視する。

「とにかく、絶対駄目ったら、駄目なんです。自己主張が強すぎる使い勝手の悪い侍女？　上等だわ。　私はリゼット、鋏(はさみ)の魔女！　そんなどこでも転がってるような、右向け右の侍女ともとは格が違うって所を、あの女に再起不能になるまで思い知らせてやるんだからっ」

シャキンと鋏を頭上に突き上げた勇姿一つ。

すっかりアイリーンの放つ女の毒気に飲まれてしまったが、そもそもあの女の言うことを真に受けて従う必要など全くないとリゼットは思った。

いつの間にか見返りを求めて、一番大事なことを忘れかけていたとリゼットは口を噛(か)む。

重要なのは見返りなど望まず、ただ自分の主人の幸せを願うことなのだと・・・・・・。

ご褒美を貰うことを頭に置いた恋など、そんな安っぽいものは不要。
リゼットは口元に笑みを浮かべた。

負けねぇぞ、こんちくしょぉぉっと雄叫(おたけ)びを上げるリゼットと、頑張れとぱちぱち控(ひか)えめの拍手を送るマートン。

そして、そんな光景を見上げる影ひとつ。
俺は思わず口元を引きつらせた。

「俺の見せ場・・・・・・全部、船長に持って行かれた」

がくりと俺は肩を落とす。
いやぁ、リゼットを慰(なぐ)める役は俺がやりたかったんだけどね。
今後のことを色々考えて・・・・・・。
ようやく俺の方から言い出そうと、決心がついたというのに。
なぁ？　船長、ここは年の功生かして、若者に花道を譲(ゆず)ってくれよと俺は思う。

何はともあれ、リゼットが元気になったようでなによりなわけだが。
これで、再び期は流れてしまった。

まぁ、いいか・・・・・・と、俺は盛大なため息をつくしかない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0943l/

ATARAXIA　React　簒奪王と鋏の魔女

2011年11月24日20時47分発行